(イ)かれ老ひたりとも戰場にのぞめば必ず壯者を凌がむ。

(ロ)學問は重荷を負ふて坂を攀づが如し。(明治四一、海兵)

(答)(イ)「老ひ」を「老い」に、「のぞめば」を「のぞまば」と訂正す。

(理由)「老い」はヤ行上二段活用の動詞であるから「老ひ」は誤。「のぞめば」は動詞「のぞむ」の已然形に助詞「ば」が添つて確定條件法となつて居るが、文の呼應上からいふと未然形に「ば」を添へて「のぞまば」と假定條件法を用ゐた方がよい。確定條件法を用ゐても絶對に誤といふ譯ではない。

(ロ)「負ふて」を「負うて」とする。

(理由) 四段活用の動詞の連用形に助詞「て」が續く時は、波行のものは「ウ」音便にする。「攀づが如し」を「攀づるが如し」と訂正す。

(理由)「攀づ」は上二段活用動詞の終止形であつて、助詞「が」は動詞助動詞等に接續する時は、その連體形を承けるから「攀づる」としなければならぬ。

〔試問〕 左の文の中に誤謬あらば之を示せ。

(イ)少年に學ばざれば老いて悔ゆるとも及ばず。

(ロ)勉强しし甲斐ありて首尾よく入學せり。

(ハ)之を聞きて涙落さぬものなぞなかりし。(明治四一、千葉醫專甲)

(答)(イ)「悔ゆるとも」を「悔ゆとも」と訂正する。又「及ばず」は「及ばじ」とする。「學ばざれば」は「學ばずば」とする。

(理由) 假定條件法の助詞「とも」は動詞の終止形から接續する。然るに「悔ゆる」は上二段活用の連體形故「悔ゆ」とする。次にこの假定條件法に呼應する爲に「及ばず」を「及ばじ」とする。

「學ばざれば」は「學ばずば」とする。

(理由) 確定條件法の助詞「とも」は動詞の終止形から接續する。然るに「悔ゆる」は上二段活用の連體形故「悔ゆ」とする。次にこの假定條件法に呼應する爲に「及ばず」を「及ばじ」とする。「學ばざれば」は確定條件法であるから、假定條件法にした方がよい。

(ロ)「勉强しし」を「勉强せし」に正す。

(理由) 過去の助動詞「き」の連體形「し」は佐行變格活用には未然形から添はる。

(ハ)「なぞかなかりし」とする。

(理由)「なかりし」の「し」は過去の助動詞「き」の連體形である故、この結びに呼應する爲に、形容動詞「なかり」の前に「か」を挿入しなければならぬ。本來はこの「か」は「し」に添はるべきものである。

〔試問〕 左の文中に誤謬あらば之を正し且つ簡明に其の理由を説け。

(イ)人才學なくば身を立て能はず。

(ロ)既に中學の業を卒へるが故にまさに進むで高等の學校に入りたり。(明治四一、高等學校)

(答) (イ)「才學なくば」を「才學なければ」とし、「立て」を「立つる」と訂正する。

(理由) 「才學なくば」は假定條件法であるから、已然形に「ば」をつけて確定條件法とし、「能はず」に呼應せしめる。「能はず」といふ詞は「何々する事」の下に接續する語法であるから、「事」が省かれて居る時は當然連體形に接すべきである。然るに「立て」は下二段活用の連用形である。故に「立つる」とする。

(ロ)「卒へる」を「卒へたる」に、「進む」を「進ん」に、「入りたり」を「入らんとす」と訂正する。

(理由) 「卒へ」は下二段活用の動詞であるから「り」といふ現在完了時を附けることは出來ない。そこで「たり」の連體形「たる」を以て之に代へる。

「進む」は撥音便としてこゝは用ゐられて居るから「む」を「ん」にする。

「まさに」は未來をあらはす副詞であるから、之に應じて「入らんとす」と訂正しなければならぬ。

〔試問〕 左の文中に誤謬あらば之を正せ。

(イ)これより内に車乘入るるべからず。

(ロ)雨は降るとも風は吹かず。

(ハ)行きても見たき心地なんせらる(明治四二、千葉醫專乙部)

(答) (イ)「乘入るべからず」と正す。

(理由) 「乘入る」といふ動詞は下二段活用であつて、「乘入るる」はその連體形である。然るに助動詞「べかり」は動詞の終止形から接續する故「乘入るべからず」とせなければならぬ

(ロ)「吹くまじ」とする。

(理由) 「とも」といふ假定條件法が上に用ゐてあるから、之と呼應する爲である。或は「雨は降れども」としてもよい。

(ハ)「せらるゝ」とする。

(理由) 「なん」といふ助詞に應ずる結びは連體形を以てしなければならぬ。然るに「らる」は助動詞の終止形であるから誤である。

〔試問〕 文法上の正不正を問ふ。

山ありとも。川なきとも。放歌するな。恩を忘るな。毎朝何時に起くか。（明治四一、金澤醫專）

（答）山ありとも（正）川なきとも（不正、助詞「とも」は形容詞の連用形を承ける）放歌するな（不正、助詞「な」は終止形を承ける）恩を忘るな。（正）毎朝何時に起くか。（不正 助詞「か」は連體形につゞく）

〔試問〕左の語句に誤あらば正せ。

（イ）笑ふて答えず。

（ロ）汝は何歳なるや。

（ハ）飢えたる人に食をあたふ。

（ニ）市街の中央に大砲を据へて頻りに打ち出せしかば諸軍勢に乘じて進みし

（ホ）恥じて能く改め覺へて忘れず。

（答）（イ）笑ふて答へず。

（ロ）汝は何歳なりや。（但し、ここでは「何」といふ語が上にあるから「何歳なるか」とする方が正しい。）

（ハ）飢えたる人に食をあたふ。

（ニ）市街の中央に大砲を据えて頻りに打ち出ししかば諸軍勢に乘じて進みき。

（ホ）恥ぢて能く改め覺えて忘れず。

〔試問〕左の文中に誤あらば之を正し、且つその理由を述べよ。

（イ）此所に塵芥を棄てべからず。

（ロ）仁德天皇はいと慈仁におはしし君なり。

（答）（イ）「棄つべからず」とする。

（理由）助動詞「べかり」は終止形から接續する。

（ロ）「おはせし君なり」とする。

（理由）「おはす」は佐行變格活用の動詞、「し」は過去の助動詞「き」の連體形で例外として佐變の未然形につゞく。

〔試問〕左の文中に誤あらば訂正せよ。

(イ)當日雨天なれば巡延の事と心得るべし。
(ロ)負ふた子に教ゑられて淺瀬を渡る。(明治四二、長崎高商)

(答)(イ)當日雨天ならば順延の事と心得べし。
(理由)「雨天なれば」は確定條件法故、確定條件法を用ゐて「ならば」とし、「べし」は終止形を承ける故連體形の「心得る」を「心得」と終止形にする。
(ロ)「教ゑ」を「教へ」と正す。
(理由)「教」はハ行下二段活用の動詞であるからである。

〔試問〕左の文に誤あらば正せ。
(イ)汝若し今にして斷然之を廢せずば後必ず悔ふる事あり。
(ロ)我が商店にては性質敏慧にして事務に通曉の者を要す。
(ハ)我が兵士よ讐へ殺戮さるまでも誓ふて敵に降服するな。
(ニ)己自ら爲しえざることは之を人に强ゆべからず。(明治四二、山口高商)

(答)(イ)汝若し今にして斷然之を廢せずば後必ず悔ゆる事あらん。



(ロ)我が商店にては性質敏慧にして事務に通曉せる者を要す。
(ハ)我が兵士よ縱令殺戮せらるとも誓うて敵に降服すな。
(ニ)己自ら爲しえざることは之を人に强ふべからず。

〔試問〕左の文に誤謬あらば正せ。
(イ)明日は水曜日なりや。
(ロ)今日は何曜日なりや。
(ハ)明日も亦こゝに來るべし。
(ニ)明日も亦君を訪問すべし。(明治四二、外國語學)

(答)(イ)明日は水曜日なりや。(正)
(ロ)今日は何曜日なるか。
(ハ)明日も亦こゝに來べし。
(ニ)明日も亦君を訪問すべし。(正)

〔試問〕 左の文に文字及び文法の誤謬あらば其の右傍に訂正せよ。

蘭相如の舍人相共に諫めて曰はく我等が父母を捨てゝ來りて君に使ゆるはたゞ君の高義を慕ふてなり然るに今廉頗を懼れて隱れたまふまことにかようの事はよのつねの人もはづかしく思ふことなりいはんや君にをいておや我等箇樣の君につかゑて何かせんたゞ暇を得て歸り去らむ。（明治四二、陸士）

（答） 蘭相如の舍人相共に諫めて曰はく我等が父母を捨てゝ來りて君に仕ふるはたゞ君の高義を慕ふてなり然るに今廉頗を懼れて隱れたまふまことにかやうの事はよのつねの人もはづかしく思ふことなりいはんや君においてをや我等斯樣の君につかへて何かせんたゞ暇を得て歸り去らむ。

〔試問〕 次の文の誤を正し且其の理由を詳說せよ。

（イ）人と獸の差異は言語を有すと有せざるとによりて別るると或人いへり。

（ロ）花を咲かしむるも雨、散らせしむるも亦雨ならずや。

（ハ）彼もし兄の剛健なるに似れば死して身後の名を成さむ。もし又弟の如き怯懦ならば生きて生前の辱を受くるべし。（明治四二、專門檢定）

（答）

（イ）人と獸との差異は言語を有すると有せざるとによりて別ると或人いへり。(1) (2) (3)

（理由）(1) 人と獸と並列の格であるから、上下に「と」といふ助詞を置いて相應じなければならぬ。

(2) 並列格の助詞「と」は動詞を承ける時は連體形に添はらなければならぬ。

(3) 指定の「と」（或人は補語格の「と」といふ）は動詞、助動詞、形容詞などに連續する時は「と」より上にある句を一の體言と見做すから總て切れる語に添はる。依て「別る」と終止形にする。

（ロ）花を咲かしむるも雨散らしむるも亦雨ならずや。

（理由）「しむ」は動詞の未然形に接する助動詞。「散る」の未然形は「散ら」である。

（ハ）彼もし兄の剛健なるに似ば死して身後の名を成さむ。もし又弟の如く怯懦ならば生きて生前の辱を受くべし。(1) (2) (3)

（理由）(1) 「似れば」は確定條件法。上に「もし」の語があつては一致しない。そこで「似ば」と假定條件法にせなければならぬ。

(2) 「如き」は連體形である。そして「怯懦なら」は一種の形容動詞と見るべきもの故連用形の（如く）から續くべきである。

(3)「べし」は終止形に接續すべき助動詞である。「受く」は下二段活用でその終止形は「受く」である。

〔試問〕 次の文中に誤あらば訂正し片假名にて記したる部分を漢字に改めよ。

(イ)誠に井カンの至に絶へず。

(ロ)火も燒かず水にもオボれず。

(ハ)チウセンの決果を御ヒロウ致候。

(ニ)若し不都合の點あれば指摘さるべし。(明治四三、長崎高商)

(答)(イ)誠に遺憾の至に絶えず。

(ロ)火にも燒かれず水にも溺れず。

(ハ)抽籤の結果を御披露致候。

(ニ)若し不都合の點あらば指摘せらるべし。

〔試問〕 左の文に誤あらば訂正せよ。

昔の旅行はさこそ苦しかりけりと思はれるど今や然らず汽車汽船の便ありて絶へて苦痛なきのみかは坐して名所古跡を覽るの愉快ありき。(明治四三、女子高師文科)

(答) 昔の旅行はさこそ苦しかりけめと思はるれど今や然らず汽車汽船の便ありて絶えて苦痛なきのみならず坐して名所古跡を覽るの愉快あり。

〔試問〕 左の文に誤あらば訂正せよ。

余は久しく病床に呻吟せしが母が心を盡せしかひありてさしも重かりき病氣もやう〳〵癒へて歩行に堪ゆるに至れり。(同上理科)

(答) 余は久しく病床に呻吟せしが母が心を盡ししかひありてさしも重かりし病氣もやう〳〵癒えて歩行に堪ふるに至れり。

〔試問〕 左の文に文字及び文法の誤謬あらば其の右傍に訂正せよ。

困苦に絶え得る人は年老ひて憂なけん。

先づ神社に詣づるべし。

能く長上に使ふ人と考へ居り候。(明治四三、醫士)

(堪へ) (老い) (なからん)

(答) 困苦に絶え得る人は年老ひて憂なけん。

(イ) 先ず神社に詣づるべし。

(ロ) 能く長上に使ふ人と考へ居り候。（仕ふる人）

〔試問〕 文典上の誤を正せ。

春の夜の闇はあやなし梅の花色ぞ見えね香やはかくるれ。（明治四三、盛岡高農）

（答） 春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるる。

〔試問〕 左の諸文中に若し誤あらば正せ。

(イ) 若し己達せんと欲すれば先づ人を達せしむ。

(ロ) 飢へ且つ凍へたる者は衣食をゑらぶにいとまあらず。

(ハ) 病氣も已に全快いたし候はば御心配下されまじく候。（明治四三、専門檢定）

（答） (イ) 若し己達せんと欲せば先づ人を達せしめよ。（又は、達せしむべし）

(ロ) 飢ゑ且つ凍えたる者は衣食をえらぶにいとまあらず。

(ハ) 病氣も已に全快いたし候へば御心配下さるまじく候。



〔試問〕 次の文中に誤あらば訂正し、片假名にて記したる部分は漢字に書き改めよ。

(イ) 人の好意を無にするべからず、人の親切を忘るるべからず。

(ロ) コノダンゴアイサツ申上奉候。

(ハ) 天氣は決して心配なくとも道路はサゾ惡しからむ。

(ニ) さる仕事はニンブダチにやらし給へよ。（明治四四、長崎高商）

（答） (イ) 人の好意を無にすべからず。人の親切を忘るべからず。

(ロ) 此段御挨拶申上げ奉り候。

(ハ) 天氣は決して心配なけれども道路は嘸惡しからむ。

(ニ) さる仕事は人夫達にやらせ給へよ。

〔試問〕 左の文の誤を正し其の理由を略述せよ。

今よりはよく〳〵行を慎むでかゝる過は再びせまじとぞ誓ふたり。（明治四四、女子高師）

（答）今よりはいよ〳〵行を慎(ん)むでかゝる過は再び(す)せまじとぞ誓ふたり。(う)(たる)

（理由）(1) 撥音便故「ん」とする。

(2) 助動詞「まじ」は良行變格活用以外の動詞は終止形から連續する。然るに(せ)は佐行變格活用の未然形であるから「す」とする。

(3) 「ぞ」といふ係の助詞に呼應するため下を連體形「たる」で結ぶ。係結のことは後の章で説明する。

(4) 「たり」に續く爲め、「う」音便にする。

〔試問〕左の語句につき文字文法の誤あらば正せ。

(イ) 誰か君の成功を祝せざるものあらざらんや。

(ロ) かくまでに國家に盡さんこそ有りがたき。

(ハ) 儉より奢に移ることは易すく奢より儉に入ることは難し。

(ニ) 若し少壯にして學ばざれば老ひて侮ゆれども及ぶことなかるべし。

（大正元、陸士）

（答）(イ) 誰か君の成功を祝せざるものあらんや。



(ロ) かくまでに國家に盡さんこそ有りがたけれ。

(ハ) 儉より奢に移ることは易く奢より儉に入ることは難し。

(ニ) 若し少壯にして學ばば老いて侮ゆとも及ぶことなかるべし。

〔試問〕左の文に誤謬あらば之を正せ。

(イ) 風吹かば花が散る。

(ロ) その戸を開きてこそ見んと思ひけん。（大正元、上田蠶糸）

（答）(イ) 風吹けば花が散る。（又は、風吹けば花散らん。）

(ロ) その戸を開きてこそ見めと思ひけん。

〔試問〕左記の語句中國文法上の誤あるものを其の文字の右傍に訂正すべし。

（説明を要せず）

(イ) 去らんと欲すれば去れ我必ずしも止めず。

(ロ) 人を遣りて見せしめたるに果して火災の起れるなりき。

(ハ)感謝に堪えず。
(ニ)我が言う事を用いずは後に悔ふるとも及ばじ。
(ホ)今より其案を議さんとす。（大正二、神戸高商）

(答)(イ)去らんと欲すれば去れ我必ずしも止めず。
(ロ)人を遣りて見せしめたるに果して火災の起れるなりき。
(ハ)感謝に堪えず。
(ニ)我が言う事を用いずは後に悔ふるとも及ばじ。
(ホ)今より其案を議さんとす。

〔試問〕左の文中文法の誤謬不穩當又は文意の明瞭ならざるものあらば訂正若しくは改作すべし。口語と文語とによりて用語を異にするものあらば其の由を附記すべし。

(イ)思ふて居るばかりでは埒があかぬ言ふて見よ。
(ロ)二人ながら毎日よく勉強する。
(ハ)この陣地さへ落せば他は憂ふるに足らず。
(ニ)堅固なる旅順の要塞すら陥落せる程なれば云々。
(ホ)外國事情に通せざるものいかでか綿密なる軍備擴張の批評を爲し得んや。（大正二、陸軍經理）

(答)(イ)「思ふて」を「思うて」とし、「言ふて」を「言うて」とする。元來助詞「て」はハ行四段活用の動詞に接續する時は、その連用形を承けるから、「思ひて」「言ひて」とあるべきであるが、音便によつて「ひ」が「う」に轉ずる。
(ロ)文法上の誤謬は別にないが、「二人ながら」を「二人共」とすると文意は一層徹底的である。
(ハ)「陣地さへ」を「陣地だに」とする。助詞「さへ」は添加の意義を持つて居り、「だに」は事物の輕きを指示して他の重き事物を類推せしめる意を示す。

(ニ)「堅固なる旅順の要塞すら陥落せしめし程なれば云々」とした方が穩當であ。

(ホ)「外國の事情に通ぜざるものいかでか綿密に軍備擴張の批評を爲し得ん」とする。(又は、軍備擴張の綿密なる批評とする)

〔試問〕 左の文に誤あらば訂正し且つ其理由をも附記せよ。

(イ)かつて軍人たらむと思ひたる望も今は空しくなりき。

(ロ)當日若し雨天なれば順延の事と心得るべし。

(ハ)世にうとんじらるゝことのみ苦しうこそ存じ候。(大正二、專門檢定)

(答)(イ)「思ひたる」を「思ひたりし」とし、「空しくなりき」を「空しくなりぬ」とする。

(理由) 軍人たらんことを思つた時は過去に於て完了して居り、希望の空しくなつたのは現在に於て完了して過去の事ではないからである。

(ロ)(2)「雨天なれば」を「雨天ならば」とする。

(理由) 「若し」といふ假定の副詞があるに拘らず「雨天なれば」と確定の條件法を用ゐて居る。故に「なり」の未然形「なら」に「ば」を添へて假定の條件とする。

(2)「心得るべし」を「心得べし」とする。

(理由) 助動詞「べし」は動詞の終止形を承ける。然るに「心得る」は下二段活用動詞の連體形である故、その終止形「心得」を用ゐて「べし」を接續させる。

(ハ)(1)「世にうとんじらるる」を「世にうとんぜらるる」とする。

(理由) 助動詞「らる」は四段活用、奈行變格活用良行變格活用以外の動詞の未然形につく。「うとんず」は下二段活用故その未然形は「うとんぜ」である。

(2)「苦しうこそ存じ候へ」とする。

(理由) 「こそ」といふ係があるから已然形の結びで應じなければならぬ。此の事項は後章で詳說する。

〔試問〕 左の文に誤あらば之を正し其の理由を述べよ。

己れの言ひにくき事をば人に言はさす。(大正三、東京高師)

(答) 「己れ」の「れ」を省く。

(理由) 「己」は體言で「れ」の音のみを切り離すべき性質のものでないからである。

「言はさす」を「言はす」とするか、又は「言はしむ」とする。

(理由) 動詞「言ふ」は四段活用故「さす」といふ助動詞は連接しない。

〔試問〕 左の文中の誤謬を正し且つ其の理由を略記せよ。

人如何に笑うとも自ら守る所堅く行い道に違はずむば何の恥ずる事か

これ有らん。（大正三、女子高師）

（答）「笑う」を「笑ふ」とする。

（理由）「笑ふ」は波行四段活用であるから「笑う」は誤。

「行い」を「行」とする。

（理由）「行ふ」といふ動詞は波行四段活用で、その連用形「行ひ」が名詞に轉成したのであるから、「行い」はいふ迄もなく誤であるし、又名詞となつた以上は語尾を附するに及ばない。

「違はずむば」の「む」を「ん」に代へる。

（理由）「違はずんば」は「違はずば」の撥音便であるからである。

「恥ずる」を「恥づる」とする。

（理由）「恥づ」といふ動詞は「ダ行」上二段活用故「恥ずる」は誤である。

〔試問〕左の文に誤謬あらば之を正せ。

（イ）任重ふして負荷に堪えず。

（ロ）志を遂げむと欲すれば須く努力すべし。

（答）（イ）任重うして負荷に堪へず。



（ロ）志を遂げむと欲せば須く努力すべし。

（備考）（イ）の「重ふ」は「重し」といふ形容詞の連用形「重く」の音便「う」を「ふ」に間違へたもの。「堪へ」は波行四段活用の動詞。

（ロ）の（欲すれば）は「欲する」の已然形に「ば」が連接したので確定條件法であるから之は假定條件法に改めて「若し欲するなら」の意としなければならぬ。

〔試問〕左の文章に誤あらば正し且つその理由を説明せよ。

（一）明日天氣なれば遠足せん。

（二）今日先生の出せし問題は甚だ解し易かりし。（大正三、專門檢定）

（答）（一）「天氣ならば」とする。

（理由）「遠足せん」といふ未來の事を表はして居る結びに應ずる爲に假定條件法としなければならぬからである。（呼應の部參照）

（二）「出せし」を「出しし」とする。又、「易かりし」は「易かりき」とする。

（理由）「出す」は佐行四段活用、助動詞「き」はその連用形につゞくからである。

「易かりし」の「し」は過去の助動詞「き」の連體形である。この文には何等の係がない故當然「き」で結ばねばならぬ。倘係結の章參照。

〔試問〕 左の傍線を施せるものゝ正否と其の理由とをいへ。

(イ)笑ふて答えず。

(ロ)父にておはせし人。

(ハ)恩を忘ることなかれ。

(ニ)願のかなうようにつとめよう。（大正四東京高師）

(答)(イ)「笑うて答へず。」と正す。

(理由)「笑うて」は「笑ひて」のウ音便である。

「答へ」は波行下二段活用。

(ロ)「父にておはせし人。」は正しい。

(理由)「おはす」は佐行變格活用の動詞で過去助動詞「き」の連體形「し」はその未然形に添るからである。

(ハ)「恩を忘るることなかれ」と正す。

(理由)「忘る」は下二段活用の動詞で「事」は體言故その連體形「忘るる」を以て接續させる。

(ニ)「願のかなふやうにつとめよう」と改める。

(理由)「かなふ」は波行四段活用の動詞でその連體形は「かなふ。」「やう」は「樣」の字音假名遣で體言である。

〔試問〕 左の各文中に誤あらば之を正し且つその理由を述べよ。

(イ)寺町を南に四條を西に進まば北側に宏壯の建物ありて〇〇社なる表札を掲げり。

(ロ)月霜の如く地に冴へ、風海の如く空に吼ふる夜は、人籟すべて絶へて、直に至上の聲を聞く心地す。（大正四、廣島高師）

(答)(イ)寺町を南(1)。四條を西(2)。へ進めば(3)北側に宏壯の建物ありて〇〇社なる表札を掲げたり(4)。

(理由)(1)(2)の「へ」は方向を示す助詞。「に」は位置を示す助詞であるからいけない。

(3)「進まば」は假定の條件を示すから、こゝでは「進む」の已然形に「ば」を添へて確定條件法としなければならぬ。

(4)「掲げり」の「り」は完了の助動詞で、之は四段活用及び佐行變格活用に限り接續する然るに「掲ぐ」は下二段活用であるから「たり」といふ完了の助動詞を之に添へる。

(ロ)月霜の如く冴(1)え風海の如く空に吼(2)ゆる夜は、人籟すべて絶(3)えて直に至上の聲を聞く心地す。

（理由）(1)「冴え」はヤ行下二段活用の動詞で連用形（えゝは中止法が用ゐてある）はえである。
(2)「吼ゆ」は「ヤ行」下二段活用でその連體形は「吼ゆる」である。
(3)「絶ゆ」も「ヤ行」下二段活用であるから連用形は「え」である。

〔試問〕 左の文中誤あらば正せ。

少くして勉めざるは老ひて徒らに悲まむ。（大正四、女高師）

（答）「老ひ」を「老い」と訂正する。「老ゆ」はヤ行上二段活用の動詞である。尙「徒らに悲まむ」といふ結びに應ずるため、「勉めずば」と假定條件法を用ゐる。

〔試問〕 左の文に誤謬あらば之を正し且つその理由を述べよ。

漫りに出入を禁ず。（大正五、上田蠶糸）

（答）「漫りに出入すべからず」と正す。

（理由）本文のまゝでいふと、副詞は動詞の意義を限定するから、「漫りに」は「禁ず」を修飾し「出入を漫りに禁ず」といふ意となる。之は本文の趣旨ではない。又「漫りに出入するを禁ず」とすれば、語法上間違ではないが、それでも前の理由と同じく「禁ず」にかゝる恐がある。故に「漫りに出入すべからず」と訂正す。

〔試問〕 左の文中に誤謬或は不適切なるところあらば之を指摘してその理由を述べよ。

店主は之を普及さんが爲に、各地の出張員をしてその構造と使用法の大體を說明し購求者へは一々美麗なる繪畫を彫刻せし小箱を贈呈することゝせり。（大正五、廣島高師）

（答）店主は之を普及せんが爲に、各地の出張員をしてその構造と使用法(1)との大體を說明せし(2)め、購求者へは一々美麗なる繪畫を彫刻せし小箱を贈呈せしむることゝせり。

（理由）(1)「使用法」の下に「と」を添へたのは、其の構造とその使用法とを並列したからである。
(2)「說明し」を「說明せしめ」としたのは、店主が店員を使役して說明させるのであるから「しむ」といふ使役の助動詞を「說明せ」といふ佐變の未然形に添へたのである。
(3)「贈呈する」を「贈呈せしむる」とした理由は (2)の理由と同じである。

〔試問〕 左の文に文法或は文字假名遣の誤謬あらば其の右傍に訂正せよ。

蒼々たる彼の天漠々たる此の土、その間國を立つもの幾何ぞ。東に睥睨するもの、西に窺覦するものあり、南に北に前に後に互に備え互に窺う。既に國を立てるもの宜しくその兵を强くし、その富をにぎはし退ひては百萬の敵軍海を蔽ふて來るとも守護するに足るべく、進むでは懸軍萬軍異彊絶域に望むとも勝を製するに足ることを計らざるべか

らず。

（答）蒼々たる彼の天漢々たる此の土、その間國を立つ（立つる）もの幾何ぞ。東に睥睨するもの（あり）西に窺伺する（ふ）ものあり、南に北に前に後に互に備え互に親う（う）（キタ）。既に國を立てし（立てし）（は）るもの、宜しくその兵を強くし、その富をにぎはし、退ひては（い）百萬の敵軍海を截ふて來るとも守護するに足るべく（り）進むでは（ん）萬軍異彊絶域に望むとも勝を製（制）するに足ることを計らざるべからず。

〔試問〕左の文に誤あらば之を正し且つその理由を述べよ。

もしすこしにても心をゆるむれば、忽ち他にまどはせられて、多年の苦心は全く水のあはと消へ失せぬ。（大正六、廣島高師）

（答）もしすこしにても心をゆるめ(1)ば、忽ち他にまどはされ(2)て、多年の苦心は全く水のあわと消え失せ(3)(4)む。(5)

（理由）(1)「ゆるむれば」は確定條件法である。然るに上に「もし」といふ假定を表はす語がある から假定條件法を用ゐて「ゆるめば」とする。

(2)「まどはす」といふ語は四段活用であつて、受身を表はす場合には助動詞「る」をその未然形に添へなければならぬ。そこで未然形「まどはさ」に助動詞「る」の連用形「れ」を添へて助詞「て」につゞけたのである。

(3)「あは」は「あわ」の假名遣の誤。

(4)「消え」はヤ行下二段活用であるから「消へ」ではない。

(5)「失せぬ」の「ぬ」は現在完了の助動詞であつて、文の始めが假定條件法であるのに對して呼應上適切でない。（呼應の部參照）

〔試問〕左の文に誤謬あらば之を正し且つ其の理由を述べよ。

（イ）氣候不順なれども身に恙がなし。

（ロ）人心の異なること其の面の如し。

（ハ）東京に來り上野へ遊ぶ。

（ニ）成績惡しと思ふも失望すべからず。（大正六、上田蠶糸）

（答）（イ）「恙」の下の「が」を省く。

（理由）「恙」は形容詞「恙なし」の語根の一部であつて語尾でないからである。

（ロ）「異なる」を「異る」とする。

（理由）「異り」は形容動詞で「ことな」迄が語根であるからである。

(ハ)「上野に」とする。
(理由)「へ」は方向「に」は位置を示す。遊んだ位置は上野であるからだ。
(ニ)「思ふも」を「思ふとも」とする。
(理由)「とも」といふ助詞は動詞の終止形を承けて假定の條件を示す。「も」は事物の重る意を示す助詞であるから、こゝでは「とも」を用ゐねばならぬ。

〔試問〕 左の諸題中誤謬あらば之を正せ。

(イ)老イテ後ニ悔ユコトナカレ。

(ロ)冀北ノ野ニ馬群空シキトハ、馬ナキトイフニアラズ、良馬ナキヲイフナリ。(大正六、海軍機關。海軍經理。海軍兵學)

(答)(イ)老イテ後ニ悔ユルコトナカレ。
(ロ)冀北ノ野ニ馬群空シトハ、馬ナシトイフニハアラズ、良馬ナキヲイフナリ。

〔試問〕 左の文に誤あらば正せ。理由をも説明せよ。

(イ)天の道は滿ちるをかきて足らざるを補ひ、地の道は盛なるを減じて衰ふを扶けり。



(ロ)天地はどこをることをきろふが故に萬物を促してしばらくも止まらざず。

(ハ)貧しきは常なり、富めるは常にあらず。これ富めるは集めるが爲にして集めるは物を滯らすがゆへなり。(大正七、廣島高師)

(答)(イ)「滿ちる」は「滿つる」の誤。
(理由)「滿つ」は上二段活用で、ここは「を」の上に體言が省略されて居るから、「滿つる」と連體形にしなければならぬ。
「衰ふ」を「衰ふる」にする。
(理由)「衰ふ」は下二段活用で、「を」の上には體言が省略されて居るから、「衰ふる」と連體形にしなくてはならぬ。
「扶けり」は「扶けたり」の誤。「扶く」とした方が一層よい。
(理由) 現在完了の助動詞「り」は、四段活用及び佐變の動詞に限りて添はる。然るに「扶く」は下二段活用故、他の現在完了の助動詞「つ」「ぬ」「たり」の何れかを添へねばならぬ。併し、天の道は常道であつて永久に續くものである故、「扶く」とした方が一層よろしい。
(ロ)「とどこをる」を「とどこほる」とする。

（理由）假名遣の誤である。
「きろふ」を「きらふ」とする。
（理由）假名遣の誤。
「止まらさず」を「止まらしめず」とする。又は「止まらせず」とする。「呼應」の部參照
（理由）助動詞に「さ」はない。「止まる」の未然形の下に「しむ」がついたのである。
（ハ）「集める」を「集むる」とする。
（理由）「む」は下二段活用で、「集める」は口語である。
（ニ）「ゆく」は「ゆゑ」とする。又、（ニ）「滯らする」とする。
（理由）（ニ）假名遣の誤。（ニ）助詞「が」は動詞の連體形につづく。

〔試問〕 次に擧ぐる口語文三句に就きて文法上の誤謬を正し、且つ其の理由を簡單に下方の空處に記入せよ。

（い）聊か鄙見を述べやうと思ふ。
（ろ）深い理由があるのだろう。
（は）御考に一任しましやう。（大正七、東京高商）

（答）（い）「述べやう」は「述べよう」の誤



（理由）「述べん」が「述べう」となり、更に「述べよう」となつたのだから「よう」と書かねばならぬ。
（ろ）「だろう」を「だらう」とする。
（理由）「であらん」が「であらう」となり、更に「であ」が約つて「だ」となり、「だらう」となつたのである。
（は）「ましやう」を「ませう」とする。
（理由）「ます」の未然形「ませ」に「ん」がつき、その「ん」が音便で「う」と變つたからである。

〔試問〕 左の文に誤謬あらば之を正し。且つ其の理由を述べよ。

（イ）功を急ぎ過ちするな。
（ロ）飢うとも周の粟は食はじ。
（ハ）世のならはしこそはかなきものなり。（大正七、上田蠶絲）
（ニ）教ゆれど覺へず。

（答）（イ）「するな」を「すな」とする。
（理由）「な」は終止形に續く助詞であつて、「する」は左變の連體形。
（ロ）「教ゆれ」を「教ふれ」とする。
（理由）「教ふ」は波行下二段活用の動詞である。
「覺へず」を「覺えず」とする。
（理由）「覺ゆ」は也行下二段活用の動詞である。

(ハ)誤はない。

(ニ)「なり」を「なれ」とする。

(理由) 係「こそ」のある時は已然形で結ばねばならぬ。

〔試問〕 左の文に誤謬あらば其の右傍に訂正せよ。

(イ)容貌いかに美はしとも心ざま正しからざれば眞の人とはいはれまじ。

(ロ)音に聞へし此の壇の浦こそ源平二氏が最後の決戰をなせし古蹟なり。

(大正八、陸士)

美しく　正しからず　る

(答) (イ)容貌いかに美はしとも心ざま正しからざれば眞の人とはいはれまじ。

なしし　なれ

(ロ)音に聞へし此の壇の浦こそ源平二氏が最後の決戰をなせし古蹟なり。

え

(備考) (イ)「美はしとも」――「とも」が形容詞に連結する時は、その連用形を受ける故「美しくとも」とする。「正しからざれば」――「ば」といふ助詞は已然形に添はる時は確定條件を示す。然るにここは下に「まじ」といふ否定の推量の助動詞があつて、「若し正しいなら」の意であるから、「未然形に續けて假定の條件とせねばならない。「謂はれまじ」――「まじ」は終止形(但し良變及び之と同じ活用をする助動詞はその連體形を受ける)に連結する助動詞であるから「謂はるまじ」とする。



(ロ)「聞へし」――「聞ゆ」は也行下二段活用の動詞であるから「聞えし」とする。「爲せし」――助動詞「し」は「き」の連體形で、動詞助動詞の連用形を受ける。(但し佐變に限つてその未然形を受ける)「爲す」は四段活用の動詞であるから、その連用形は「爲し」である故「爲しし」とする。「古蹟なり」――上に係の「こそ」がある故、已然形で結んで「古蹟なれ」としなければならぬ。

〔試問〕 明日若し天氣あしければ遠足は順延と心えるべし。

右の文の誤を正しその理由を述べよ。(大正八、東京高師)

(答) 明日天氣あしくば遠足は順延と心うべし。

(理由) 「あしけれ」は形容詞の已然形で、之に助詞「ば」が添つて既定の條件を表はして居る。然るにここは「天氣がわるいなら」の意である故。假定の條件を表はす爲め「あし」の未然形「あしく」に「ば」をつけねばならぬ。「心えるべし」の「べし」は終止形に續く助動詞であるから、「心得べし」と改めねばならぬ。

〔試問〕 左の文どもに誤あらば之を訂正し、且つその理由を述べよ。

(イ)庭に植ゆる草木も伸びたるを抑えたをれたるを起しなどしてこそよき姿にはなるなりとききしか。

（ロ）弓を射らんとするものは姿勢を正しふし一本の矢をもあだになせじと思ひて心をゆるむるべからず。（大正八、廣島高師）

（答）（イ）庭に植うる草木も伸びたるを抑へたふれたるを起しなどしてこそよき姿にはなるなれと聞き。

（理由）「植う」は和行下二段活用の動詞である。「抑ふ」は波行下二段活用の動詞である。「なるなり」は上の係「こそ」を受ける故已然形で結ばねばならぬ。「聞さしか」の「しか」は「き」の已然形で、ここでは上の「こそ」を受けて居ないから終止形の「き」で結ばねばならぬ。

（ロ）弓を射んとするものは姿勢を正しうし一本の矢をもあだにせじと思ひて心をゆるむべからす

（理由）「射る」は上一段活用の動詞で、助動詞「む」は未然形を受ける故「射ん」とし、「正しくし」の音便は「正しうし」であり、「あだになせじ」の「な」は動詞の上につき、下に「そ」と應じて打消命令を表はすが、ここではその必要がないから之を省き、助動詞「べからり」は終止形を受ける故、「ゆるむべから」とする。

〔試問〕 左の文に誤謬あらば正せよ。

彼は上田に遊學の志あり。（大正八、水産講習所）

（答） 彼は上田に遊學せむとする志あり。（又は、「遊學する志」とする）

（理由） 副詞的修飾語は用言、活用連語又は他の副詞を修飾するもので、名詞を修飾することはないからである。

〔試問〕 左の文中に誤あらば正して、且つ其の理由を記せ。

（一）汝が考ふ如く容易く破られまじ。

（二）吉田君と中島君の弟は同級生なり。

（三）若し御差支も候へば御一報なし下されたく候ふ。（大正八、專校）

（答）（一）汝が考ふる如く容易に破らるまじ。

（理由） 助動詞「如く」は連體形をうけ、助動詞「まじ」は終止形を受けるからである。

（二）吉田君と中島君の弟とは同級生なり。

（或は）吉田君と中島君との弟は同級生なり。

（理由） 助詞「と」は連結する各語の下につくのが原則であるから、「弟」の下にも「と」を加へる。或は「中島君」の下に「と」を加へる。但し二つはそれ〴〵意義が異ふ。

（三）若し御差支も候はば御一報なし下されたく候ふ。

（理由） 「候へば」は既定の條件を示す。ここは「若し」といふ假定の語があるから「候はば」とする。

〔試問〕 左の語句に誤あらば訂正し其の理由を説明せよ。

(イ)某氏は本年も入學試驗を受けけり。

(ロ)塵芥を捨つるべからず。

(ハ)辛ふじて思い出でたり。(大正九、東京高師)

(答)(イ)某氏は本年も入學試驗を受けたり。

(理由) 助動詞「り」は下二段活用の動詞には續かないからである。

(ロ)塵芥を捨つべからず。

(理由) 助動詞「べかり」は終止形を受けるからである。

(ハ)辛うじて思ひ出でたり。

(理由)「辛くして」の音便は「辛うじて」であり、動詞「思ふ」は波行四段活用であるからである

〔試問〕 左の文句中の語法の誤を正せ。

(イ)籠は竹類にて製するものなり。

(ロ)遠くとも君のおはしし地へは書狀を呈さむ。

(答)(イ)籠は竹類にて製するものなり。

(理由)「もの」は名詞である故連體形から續くからである。

(ロ)遠くとも君のおはせし地へは書狀を呈せむ。



(理由)「おはす」は佐行變格活用の動詞で、助動詞「き」の連體形「し」及び已然形「しか」は、佐變に限って未然形からつづき、「呈す」は佐行變格活用で、助動詞「む」は未然形から續くからである。

〔試問〕 左の文に誤あらば之を正し、且つその理由を説明せよ。

(イ)此事は如何に處理して可なるべきや。

(ロ)下男に庭を掃除させ、下女に緣を拭はす。

(ハ)花を咲かしむるも雨、散らさしむるも亦雨ならずや。

(ニ)戊辰の際、江戸市民をして兵火を免るるを得せしめしは、勝安房と西鄕隆盛の力なり。(大正九、上田蕾絲)

(答)(イ)此事は如何に處理して可なるべきか。

(理由)「や」は疑問の詞のあとにはつづかない。この文には上に「如何」といふ疑問の語がある故「可なるべきか」とする。

(ロ)下男に庭を掃除せさせ、下女に緣を拭はす。

(理由) 助動詞「さす」は未然形の下に添はるからである。

(ハ)花を咲かしむるも雨、散らしむも亦雨ならずや。

（理由）「散さしむ」とすると、使役の助動詞が二つ重なることになる故、「さ」を省く

（ニ）戊辰の際、江戸市民をして兵火を免るるを得しめしは、勝安房と西郷隆盛との力なり。

（理由）助動詞「しむ」は動詞の未然形から續くから「得しめ」とする。又助詞「と」は連結する各語の下につくのが原則であるから、「西郷隆盛との」とする。

〔試問〕左の文に誤あらば訂正せよ。

（イ）生きとし生くるもの誰か其の生命を愛せざるものなからんや。

（ロ）昔の旅はさこそ不自由なりけんと思はるる。（大正一〇、東京高師）

（答）（イ）生きとし生けるもの誰か其の生命を愛せざるものあらんや。又は「愛せざらんや」とする。

（理由）「なからんや」は「なからうか」即ち「ある」の意であるからである。

（ロ）昔の旅はさこそ不自由なりけめと思はる。

（理由）「けん」は上に「こそ」の係がある故、その已然形「けめ」で結ばねばならぬ。「思はるる」は連體形で「こそ」の係とは全然關係がないから終止形で結ぶ。

〔試問〕左の文中に誤あらば之を正し、且つその理由を述べよ。

昔受けまじき罪をうけてこの地に生を終りし人の裔、今もなをあるやと尋ぬればかたへに青ざめる顔して立ちし一青年を指して、彼こそそれと教へけれ。（大正一〇、廣島高師）

（答）昔受くまじき罪をうけてこの地に生を終へし人の裔、今もなほありやと尋ぬれば、かたへに青ざめたる顔して立てる一青年を指して、彼こそそれと教へけり。

（理由）「受けまじ」――助動詞「まじ」は終止形を受ける故「受くまじ」とし、「終り」は自動詞で「生を」は他動詞の目的である故他動詞「終ふ」にかへ、「なを」は假名遣の誤であるから「なほ」に改め、助詞「や」は動詞の終止形を受ける故「ありや」とする。「青ざめる顔」の「青ざむ」は下二段活用の動詞であるから現在完了の助動詞「り」は續かない故「たり」にかへて「青ざめたる顔」とし「彼こそ」の「こそ」といふ係は「それ（なり）」の「なり」の已然形「なれ」で受ける筈であるのを略したのであるから、「教へけり」の「けり」で應ずべきでない。故に終は「けれ」を「けり」と改める。

〔試問〕左の四文中に誤脱あらば之を正せ。

（甲）笑ふて答えず。　（乙）此の處にごみ捨てべからず。

（丙）此の芝生に立入る可らず。　（丁）道端のむくげ馬にくはる。（大正一〇、東京商大）

（答）（甲）笑うて答へず。　（乙）此の處にごみを捨つべからず。

（丙）此の芝生に立入る可からず。　（丁）道端のむくげ馬にくはる。（誤なし）

〔試問〕 左の文章中右側に傍線を施したる語に漢字を宛て又文法上誤あらば之を正せ。

つら〳〵 あんじるに うだいのすうせいはいまやへいわのかくりつにきふ〳〵たりわがくにはごたいきやうこくのはんにれつしせかいのへいわにこうけんするのぢゆうにんをおうよろしくうちはかうきをしゆくせいしさんげふをさかんにしてこくりよくのじゆうじつをはかりそとはこくかうをあつふしねしんをのべてこくうんのしんてんをきすべきなり。（大正一一、北海道帝大）

（答） 倩々案ずるに、宇内の趨勢は、今や平和の確立に汲々たり。我が國は五大强國の班に列し、世界の平和に貢献するの重任を負ふ。宜しく内は綱紀を肅正し、産業を盛にして、國力の充實を計り外は國交を厚うし威信を伸べて國運の發展を期すべきなり。

〔試問〕 左の文中に誤あらば正せ。

（イ）況んや專門の學徒皆講學の念切なるものあるに於ておや。

（ロ）君に事え親に仕う。（大正一二、商大豫科）

（答）（イ）況んや專門の學徒皆講學の念切なるものあるに於てをや。
（ロ）君に事へ親に仕ふ。

〔試問〕 左の文中に誤あらば正せ。

（イ）心を正しふす。
（ロ）山を越へて行く。
（ハ）人の死す時その言やよし。
（ニ）塵積りて山をなす。
（ホ）獸にもいかで劣るべし。（大正一二、女高師）

（答）（イ）心を正しうす。
（ロ）山を越えて行く。
（ハ）人の死する時その言やよし。

(ニ)塵を積みて山となす。(又は)塵積りて山となる。
(ホ)獣にもいかで劣るべき。



# 第三篇　文章篇

## 第一章　文の成分及びその構成

【問】文の成分とは何か。

【答】語の組立てによつて文は出來るが、その職分の上から見ると自ら數種に別れるものである。之を文の成分といふ。

【問】主語とは何か。又如何なる品詞が主語となるか。

【答】叙述の主題となる事物を示すものを主語といふ。そして主として名詞代名詞が主語となる。但し多くは助詞を伴ふ。

(主語)(助詞)
人は萬物の靈長なり。
(主語)(助詞)
彼は太郎の弟なり。
(主語)
花咲く。

【問】述語(説明語)とは何か。又如何なる品詞が述語となるか。

【答】主題となる事物の動作、存在、狀態等を叙述するものを述語又は說明語といふ。述語となる品詞は主として動詞、形容詞である。但し動詞に助動詞副詞等を添へる事もある。

雪降る。……（動詞の場合）

（述語）

花美し。……（形容詞の場合）

（述語）

山に登らむ。……（動詞に助動詞の添つた場合）

（述）

絶景といふも水の美しきなり。……（形容詞に助動詞の添つた場合）

（述）

雨烈しく降る。……（動詞に副詞が添つた場合）

（述）

風甚だ强し。……（形容詞に副詞が添つた場合）

（述）

生徒苦しげに答ふ。……（動詞に副詞句の添つた場合）

（述語）

飛行機は鳥の飛ぶ如くに過ぎぬ。……（副詞節が添つた場合）

【問】文とは何か。

【答】文とは主語と述語とが結合して一つのまとまつた思想を表すもので、正式な文には少くとも主語と述語とがなくてはならぬ。

（主）（述）

鳥啼く。

【問】客語とは何か。客語には如何なる品詞が成るか。

【答】述語の動作の目的となる語を客語といふ。客語は主として名詞代名語から成る。

われ犬を打つ。……（名詞の場合）

巡査彼を縛す。……（代名詞の場合）

右の「犬を」「彼を」は「打つ」「縛す」の何れも目的となつて居るから客語である。

【問】補語（又は補足語）とは何か。如何なる品詞が補語となるか。

【答】述語の動作狀態の標準を示し、文意を全うするに欠くべからざる語を補語（又は補足語）といふ。補語は主として名詞代名詞から成る。

余は書を彼に與へたり。……（代名詞の場合）

花美しく園に咲けり。……（名詞の場合）

右の「彼に」「園に」は一は「與へたり」の標準を示し、一は「咲けり」の標準を示し、文意を全うするに缺くべからざる語であるから補語である。

【問】客語と補語とを識別する方法を問ふ。

【答】(1) 概括的にいへば客語の下には助詞「ヲ」を伴ひ、補語の下には主に助詞「ニ」「ト」又は「ノ」「ヨリ」「ヲシテ」等を伴ふ。

(2) 客語のある場合には述語は他動詞である。

花を折る。……（他動）……（「花を」は客語）

猫を殺す。……（他動）……（「猫を」は客語）

友と行く。……（自動）……（「友と」は補語）

東より來る。……（自動）……（「東より」は補語）

人をして行かしむ。……（自動）……（「人をして」は補語）

（備考） 補語の下の「ヲ」は省かれる場合がある。

筆（ヲ）とりて手紙を書く。

助詞「ヲ」が名詞代名詞の下に添うて居ても、その名詞又は代名詞が必ず客語とは限らない。前例もそれであるが更に例をあげると、

大阪を出發す。

右の「大阪」は「を」を伴つて居るが「出發す」といふ述語の標準を示して居るので目的ではない。

故に「大阪」は補語である。

【問】 文主（又は總主語）とは何か。

【答】 一文中に主語が二つあつて、甲は全文の主部と見るべきものであつて、乙は甲の述語たるべきものの主語と見做される場合に、甲を文主といひ乙を小主語又は（主語）といふ。

（例） 大日本帝國は萬世一系の天皇之を統治す。

右の場合に「萬世一系の天皇之を統治す」は「大日本帝國は」の述部に相當して居る故「大日本帝國は」は文主で、「天皇は」述語の主語となつて居るから之を小主語といふ。

【問】 文主となり得る品詞如何。

【答】 主語と同じく主として名詞代名詞が文主となる。

（文主）象は鼻長し。

（文主）彼は力强し。

【問】 修飾語とは何か。

【答】 主として文の意味を詳述する爲に用ゐられて、文主、主語、客語、補語、述語の意義を修飾するものを修飾語といふ。

（主語の修飾語）老いたる（主語）父は、（客語の修飾語）美しい（客語）本を（補語の修飾語）可愛い（補語）子に（述語の修飾語）皆（述語）やつた

【問】 修飾語は如何にして構成せられるか。

【答】 文主、主語、客語、補語の修飾語は形容詞、動詞の連體形、動詞又は名詞に結付いた助動詞の連體形若くは助詞「の」「が」を伴ふ名詞、代名詞などで、述語の修飾語は主として副詞である。

（主、修）（主）
美しき　花咲けり。
（形容詞）

（主、修）（主）
見る　人多し。
（動詞）

（主、修）（主）
前進せる　人止れり。
（動詞）（助動詞）

（主、修）（主）
楠正成なる　人あり。
（名詞）（助動詞）

（主修）（主）
太郎の　本は美し。
（名詞）（助詞）



（主、修）（主）
彼が　顔は黒し。
（代名詞）（助詞）

（客修）（客語）
彼は美しき　花を手折れり。
（形容詞）

（客、修）（客）
巡査集る　人を追ふ。
（動詞）

（客、修）（客）
劣等生優秀なる　生徒を呪ふ。
（形容動詞）

（客、修）（客）
捕手の者共追慕せし　賊を捕ふ。
（動詞）（助動詞）

（客、修）（客）
太郎次郎の　本を奪ふ。
（名詞）（助詞）

（補、修）（補）
彼は 美しき 庭に遊べり。
（形容詞）

（補、修）（補）
乞食は通行せる 群集に食を乞へり。
（動詞）（助動詞）

（補、修）（補）
太郎は叔父なる 人に叱責せらる。
（名詞）（助動詞）

（補修）（補）
次郎は 兄の 本に落書せり。
（名詞）（助詞）

（述修）（述語）
彼は 早く 學校に行く。
（副詞）

（述、修）（述）
走る者屢々 倒れたり。
（副詞）

【問】 獨立語とは何か。



【答】 獨立語とは呼掛の語及び感歎の語をいふ。獨立語は他の成分とは全く關係がない。

あゝ、悲し。

君、彼は誰か。

【問】 成分の並立とは何か。

【答】 一つの主語に、二つ以上の述語がつき、又は一つの述語が二つ以上の主語を持つ事がある、それを成分の並立といふ。

（主）（述）
憂國の士は且つ泣き且つ笑へり。

（主語）（述）
太郎 次郎及び三郎 來れり。

【問】 主部、客部、補部、述部とは何か。

【答】 文の成分は主語、客語、補語、述語、時としては文主、及びそれ〴〵の修飾語から成立つが、主語（時としては文主も）客語、補語、述語にそれ〴〵の修飾語を加へたものを、それ〴〵主部、（文主部）客部、補部、述部といふ。

（客部）（補部）（述部）
美しい花が 廣い庭園に 澤山咲いて居る。
（主、修）（主）（補修）（補）（述修）（述）

（文主部）（主）（述）
魯鈍な彼は　力は　強い。
（文主、修）（文主）

（主部）　（客部）　（述）
勇敢なる巡査は　力強い盜人も　仆した。
（主、修）（主）　（客、修）（客）

【問】 叙述部とは何か。

【答】 主部に對して客部、補部、述部を總稱して叙述部といふ。

（主部）　（叙述部）
怠慢な彼は　學校の教科書を全く諳まなかつた。
（主修）（主）　（客修）（客）（述修）（述）
（主部）　（客部）　（述部）

【問】 文の成分を表示せよ。

【答】 文主の修飾語 } 文主部
文主
主語の修飾語 } 主部
主語

客語の修飾語 } 客部
客語
補語の修飾語 } 補部　} 叙述部（文主ある時は主部も叙述部中に含まる）
補語
述語の修飾語 } 述部
述語

## 第二章　文の成分の位置及びその省略

【問】 文の成分の位置に就て述べよ。（大正五、陸軍經理）

【答】 文の成分は之を排列するにほゞ一定の順序がある。

(1) 主語の位置　文の首位に置く。
（主）
馬走る。
（主）
人は萬物の靈長なり。

(2) 客語の位置　主語と述語との間に置く。
（主）（客）（述）
猫　鼠を捕ふ。
（主）（客）（述）
彼　犬を打つ。

(3) 補語の位置　客語のない文では主語と述語との中間に置く。客語のある場合には客語の上又は

下に置く。

(主)　(補)　(述)
汽車　東京驛に　着す……（客語のない場合）

(主)　(客)　(補)　(述)
私は　本を　人に　やつた。
(主)　(補)　(客)　(述)
私は　人に　本を　やつた。……（客語のある場合）

(4)述語の位置　文の終に置く。

(述)
人々山に登る。

(5)修飾語の位置　普通修飾しようとする語の上に置くのが原則であるが、述語の修飾語に限つて他の語を隔てゝ置かれる。

但し多くの場合には述語の修飾語は主語のすぐ下に來る。

(主、修)　(主)　(客修)　(客)　(述)
貧しき　人は　僅なる　賃金を　得たり。

(主)　(補修)　(補)　(述修)　(述)
人々は　高き　山に　あえぎ〳〵　登れり。

(主、修)　(主)　(述修)　(客)　(述)
疲れた　彼等は　ゆつくり〳〵と　路を　歩いた。



(主、修)　(主)　(述修)　(補)　(述)
清い　河が　滔々と　市中を流れて居る。

(6)文主の位置　通常文の始、主語の上に置かれる。

(文主)　(主)
式は　校長があげられる。

(7)獨立語の位置　獨立語は通常主語(又は文主)の上に置く。

(獨立語)
お梅、使に行つてお出で。

(獨立語)
あゝ、夏は暑い。

**【問】成分の倒置に就て知る所を記せ。**

**【答】** 文の成分は＝(獨立語)＝(文主の修飾語)文主＝(主語の修飾語)主語＝(客語の修飾語)客語＝(補語の修飾語)補語＝(述語の修飾語)述語＝(補語の修飾語)補語＝(客語の修飾語)客語＝(述語の修飾語)述語＝の順序に從つて排列するのが普通であるが、語調を整へ

或は語勢を強める爲にわざと成分の位置を顚倒させて排列することがある。韻文には特にそれが多く用ゐられる。左に各の場合を示さう。

主語と述語との倒置　(述)行くぞ　(主)僕は。　(述)大なる哉　(主部)父母の恩。

客語と主語との倒置　(客)孝子を　(主)誰かは　(述)嘉せざらん。　(客)猫を　(主)私が　(述)殺した。

補語と主語との倒置　(補)人に　(主)私は　(述)やった。　(補部)雲のいづこに　(主)月　(述)やどるらむ。

客語と述語との倒置　(主)誰か　(述)知らん　(客部)烏の雌雄を。

補語と述語との倒置　(主)誰か　(述)い〳〵　(補)先生に。

獨立語と述語との倒置　(述)逝きぬるかな　(獨立語)あゝ　(述)行け　(獨立語)子供。

修飾語の倒置　(述修)速に　(主)彼は　(述)走れり。　(主)吾は　(述)留らん　(述、修)悲しくとも。　(補)上野に　(述)行かう　(補修)花の。　(客)本を　(述)忘れた　(客修)彼の。

【問】成分の省略に就て知る所を記せ。

【答】文の成分は語調を整へ或は語勢を強める爲に思想の明確を缺かない範圍に於て之を省略することがある。

主語の省略。　(私は)明日出發します。

(人々は)花折るべからず。

(備考)對話、禁止、命令文には特に主語を省略する場合が多い。

述語の省略。　待てば果報が(來る。)

千里の路も足下より(始まる。)

まあお茶を一つ(召しあがれ。)

客語の省略。　誰かは(それを)知らざらん。

昨日も友を見舞ひ今日も(彼を)見舞うた。

補語の省略。　昨日も芝居に行ったが今日も(芝居に)行く。

月謝は期日迄に(會計課に)納付すべし。

## 第三章　句及び節

【問】句とは何か。

【答】文がその獨立を失つて他の語に從屬し、大きい文の一成分となつたものを句といふ。

生徒の軍歌を歌ふを聞く。

月清き夜友と散歩せり。

右の文中の「生徒の軍歌を歌ふ」「月清さ」は何れも全體の文の一部分となつてその獨立を失つて居るから句である。

（備考）文法家によると句を節ともいつて居る。

【問】句の種類をあげて之を説明せよ。

【答】句には左の四種類ある。

(1)名詞的句。名詞のやうに用ゐられる句をいふ。

雪の降るは鵜毛の散るが如し。

余は人の侮るを悲しむ。

右の「雪の降る」「鵜毛の散る」「人の侮る」は何れも「雪の降る事」「鵜毛の散る有樣」「人の侮る事」といふ風に、名詞と同樣に用ゐられて居る。

(2)形容詞的句　形容詞のやうに用ゐられる句をいふ。

風涼しき夜はいねやすし。

月明かなる夜は星稀なり。

彼は品性下劣なる友と交際せり。

右の「風涼しき」「月明かなる」「品性下劣なる」は何れも「夜」「友」の形容詞のやうに用ゐられて居る。

(3)副詞的句　副詞のやうに用ゐられて居る句をいふ。

彼は德望は缺けて居るが金力に於て勢力がある。

雨降れば路惡し。

彼は「家族舟に乘つて難を避けよ」と命じた。

右の「德望は缺けて居るが」「雨降れば」「家族舟に乘つて難を避けよと」は皆それ〳〵副詞風に用ゐられて居る。

(4)述語的句　述語の用をなす句をいふ。

彼は心潔白なり。

日本人は髮黑し。

右の「心潔白なり」「髮黑し」文主（總主語）に對する述語として用ゐられて居る。

【問】名詞的句は如何にして作るか。

【答】文を變じて名詞的句とするには、その述語である動詞（形容動詞）形容詞、又は活用連語の連體形を用ゐて之を作る。時としては連體形の下に「コト」「モノ」等を伴ふことがある、が之も含めて一つ

の句と見る。

余は智の劣れる(こと)を悲しむ。

人は心の美しき(もの)を尊しとす。

君は君たらざるべからざるを知るを要す。

【問】 形容詞的句は如何にして作るか。

【答】 名詞的句の構成と同じである。名詞的句では、句そのものが主として名詞として用ゐられるのに反し、形容詞的句は形容詞的修飾語として名詞を修飾して居る點が相違する丈である。

兄の本を讀む聲が高く聞える。

鼻が高い人に途中で逢つた。

【問】 副詞的句は如何にして作るか。

【答】 文を變じて副詞的句とするには、その述語である動詞。(又は形容動詞)形容詞、活用連語の連用形又は是等の述語に助詞「て」(で)「テ」(デ)「ば」(バ)「とも」(テモ)「ども」「ど」「に」(ノニ)「を」が「ガ」「と」等を添へた連語を用ゐる。

飛行機は鳥の飛ぶ如く空を通過せり。

一週間たつと雨が降り出した。

間斷なしに日が照りつゞいた。



春は來れども花咲かず。

罪惡はます〳〵行はれて人間はいよ〳〵墮落した。

雨降りけるが路惡しからず。

傘なきを彼は强ひて歸れり。

【問】 節(或は對立節、或は獨立句)とは何ぞや。

【答】 一つの文中に於て二つ以上の文章が互に對立して主從の關係なく、全く同等の價値をもつて連續して居るものを節といふ。

友歌ひ　われ舞ふ。

月明かに　星稀なり。

甲去り、乙來り、丙走り、丁止る。

【問】 對立節は如何にして構成するか。

【答】(1) 節を連接せしめるには述語の動詞、形容詞、活用連語の連用形を用ゐる。

君の恩は山よりも高く　親の恩は海よりも深し。

兄は褒められ　弟は叱らる。

(2) 且、又、或は等のやうな接續詞、又は接續の助詞「て」「して」「テ」「デ」「バ」「シ」等をその述

語に添へて作る。

本を讀み且つ食ふ。

山を辿り又河を渡る。

日は入りて月は輝く。

鳥も住めば獸も住む。

本は兄のものにして鉛筆は弟のものなり。

## 第四章　文章の構造上の種類

【問】構造上より見たる文の種類を列記せよ。

【答】(1)單文　(2)複文　(3)重文(或は合文)の三種類がある。

【問】單文とは如何なるものか例をあげて説明せよ。

【答】單文とは句を含まない文をいふ。

(主)(述)
山高し。

(主)(補)(客)(述)
私は　彼に　本を　與へた。



(主部)　(客部)　(補部)　(述部)
賢い彼は　むつかしい本を　二番目の妹に　丁寧に教へた。

前述した如く、單文は主部と叙述との文法上の關係が唯一回丈成立するものをいふのであるから、二個以上の文の成分を有して居ても句を含まない限りでは單文である。

(主)(主)(主)
父も　母も　兄も早く死せり。

(客)(客)(客)
洪水は家屋　家畜。及び田畑を洗流せり。

(補)(補)(補)
美しき花は山に　野に　庭に咲き滿ちたり。

(修)(修)(修)
旅行中余は廣く　清く且つ早き流を渡れり。

(注意)(一)文の主成分を一つでも缺く場合は句でないから、そんな部分が文中にあつても矢張單文である。

母は子供の着る着物をぬへり。

猫の食ふ皿はきたなし。

(二)文主の叙述部も單純に説明の用をなす文であるから、之も單文の中に加へて取扱ふ。

（文主）（叙述部）
日本人は　脊が低い。
（文主）（叙述部）
よく走る者は　足強し。

【問】 複文とは何か。

【答】 句（即ち名詞的句、形容詞的句、副詞的句）を含む文を複文といふ。故に主部と述部との文法上の關係が少くとも二回以上全文中に成立して居なければならぬ。且つその句の價値が對等であつてはならぬ。

（名詞的句）
教育者が生徒を指導するには親切を旨としなければならぬ。

（形容詞的句）
月清き夜友と海に遊ぶ。

（副詞的句）
花散れども蝶驚かず。

【問】 重文とは何か。

【答】 二つ以上の對立節から出來て居る文をいふ。

水は夏に宜しく、月は秋に宜し。

得るは難く、失すは易し



【問】 混文とは何か。

【答】 單文、複文、重文は必ずしも單純に用ゐられないで、その中に單文複文又は重文を含む場合があつて頗る複雜して居る。それらのものを混文といふのである。

複文（對立句）
（形容詞的句）
心清き人はその心常に樂しく。

複文（對立句）
（形容詞的句）
心惡しき人はその心常に苦し。（重文）

（對立句）（對立句）
鳥啼き　蝶舞へども心少しも樂まず。（複文）

（重文）（副詞句）

（形容的句）（副詞的句）
久方の光のどけき春の日に　靜心なく花の散るらむ。（複文）

## 第五章　性質上より見たる文の分類。

【問】 性質上より文章を分類してその名稱を列記せよ。

【答】性質上から文章を分類すると左の四種となる。

(1) 平叙文（又は叙述文 説明文）　(2) 疑問文。　(3) 命令文。　(4) 感歎文。（又は詠歎文）

【問】平叙文（叙述文）とは如何なるものか。

【答】平叙文とは事實のありのまゝに叙述する文をいふ。

この文體は最もその範圍廣く。肯定、否定、推量、等種々ある。

山に登る。……（肯定）

見れども見えず。……（否定）

花咲かば人來らむ。……（肯定的推量）

風凪ぐとも出帆せまじ。……（否定的推量）

【問】疑問文とは如何なるものか。

【答】疑問を表す文を疑問文といふ。

(1) 疑問文には多く「や」「か」又は「ぞ」を添へる。

但し「や」「か」「ぞ」が文中にあることもある。

(2) 何、誰、何處、何れ、いかゞ、等の疑の語を用ゐる。

但しこの場合には「や」「か」を省くことがある。

彼は人なりや。



今は何時か。

かしこを行くは誰ぞ。

人やある。燭持て。

甲と乙と何れかよき。

雲の何處に月宿るらむ。

何れを花とわきて折らまし。

【問】命令文とは如何なるものか。

【答】要求をいひ表す文を命令文といふ。故に命令文は命令、禁止、希望の意を表す。

停車場迄行け。

枝を折るべからず。

土手にな上りそ。

君は君たれ。

使に酒をのませよ。

明日月謝を忘るな。

徒に死すること勿れ。

常に勉强すべし。

【問】感歎文とは如何なるものか。

【答】感動を表はす文を感歎文（感動文）といふ。

あゝ、天なるかな。命なるかな。

あはれ敢果なき最期なるかな。

あな尊き御法。

やあうまくやつたな。

あはれ悲しも。

マア面白かつたことネ。

花の色は移りにけりな。

鯉が大變居るよ。

すべて神の社こそ捨てがたくなまめかしきものなれや。

人まつ虫の聲すなり。

あはれ常なきはこの世なりけり。

（備考）(1) 感動詞中「いざ」「いで」のやうに單に發語の意を示すもの、若くは「かし」のやうに單に强意に用ゐる助動詞等を含んだ文は感歎文ではない。



(2) 疑問文でもその述語に感歎余情の助詞を添へると感歎文とすることが出來る。

あれは何時のことであつたかナア。

あゝ何ぞその行の痛切なるや。

## 練習問題

〔試問〕今日といふ語を修飾語とせる文と主語にせる文とを一つづゝ作れ。（明治四〇、東京高師）

【答】今日早速行かむ。（修飾語）

今日は一月元旦なり。（主語）

〔試問〕用例を擧げて單文、合文（重文ともいふ）、複文の區別を説明せよ。（明治四四、東京高師）

【答】「第四章文章の構造上の種類」參照。

〔試問〕文の性質上の種類を説明せよ。

(1) 馬は兵卒を騎せて走る。

(2)貴官は如何なる御方か。

(3)汝それ之を勉めよ。

(4)あゝ、あつぱれの兵士よ。（大正五、陸軍經理）

【答】(1)叙述文（説明文、平叙文）(2)疑問文。(3)命令文。(4)感歎文。（咏歎文）

（備考）文の種類を表示すると左の如し。

文の種類
- 形式上
  - 單文（句ヲ含マズ）
  - 複文（句ヲ含ム）
  - 重文（對立節ヲ含ム）
- 性質上
  - 平叙文（説明文、叙述文）
  - 疑問文
  - 命令文
  - 感歎文（咏歎文）

## 第六章　文章の結法

附　係結法（明治四一、女子高師、明治四二、專門檢定、大正二、上田鑑絲、大正二、東京高師）

【問】文の結び方に就て概言せよ。



【答】文を結ぶには種々の形式がある。

(1)終止形で結ぶもの。

文を結ぶ最も普通の形式は動詞、形容詞、助動詞の終止形で結ぶ。

吾は學校に行く。

花美し。

門は西に向つて立てり。

(2)連體形で結ぶもの。

文中に「ぞ」「や」「か」「なむ」等の助詞がある時は、その文の終を動詞、形容詞、助動詞の連體形で結ぶ。

人ぞ（なむ）來る。

われぞ（なむ）行くなる。

花ぞ（なむ）美しき。

人や（來る／來つる／遲き）

誰か（行く／行くべき／よき）

（注意）「ぞ」「や」「か」「なむ」の下には連體形の語が省略される場合が屢々ある。

彼は昨日行きけりとぞ。（聞く）

彼は何處にて逢ひける人にや。（あらむ）

遂に死せりとなむ。（いふ）

如何なる科にか。（あらむ）



(3) 已然形で結ぶもの。

文中に「こそ」といふ助詞がある時はその終を動詞、形容詞、助動詞の已然形で結ぶ。

命こそ終れ。

命こそ長けれ。

命こそ長かりしか。

（注意）「こそ」の下には已然形の語が省かれることが屢々ある。誠に褒むべきこと

にこそ（ありけれ。）

（あれ。）

(4) 命令形で結ぶもの。

文によると動詞助動詞の命令形で結んだものがある。

早く來い。

早く行け。

余をして行かしめよ。

(5) 助詞又は感動詞で結ぶもの。

(1) 疑問の助詞又は指定の助詞で結ぶもの。

行かうか行くまいか。

君は何處に行けりや。

君は何處に行くぞ。

(2) 感動詞で結ぶもの。

あはれ散果なき最期かな。

あゝ悲しいかな。

三笠の山に出でし月かも。

【問】係結法に就て知れる所を記せ。

【答】文中に助詞「ぞ」「や」「か」「なむ」がある時は、その終を動詞、助動詞、形容詞の連體形で結び、「こそ」のある時はその終を已然形で結ぶ。此の場合に「ぞ」「や」「か」「なむ」を係といひ、之に呼應する動詞、助動詞、形容詞の活用形を結びといふ。この係と結びとの呼應の法則を係結法といふ。

（備考）(1) 口語には係結法はない。

(2) 結びは屢々省略される場合がある。(前に既に說明した)

(3) 文章によると結びの用言をいひ切らないで下に連接せしめる場合がある。之を轉結ともいふ。

かなしきどちなんいと忘れがたくてしば〳〵訪ひく。彼こそ使には行くべかりしに出でて歸らず。

(4) 「ぞ」「なん」を二段の係又は「ぞなん」の係。「こそ」を「三段の係」又は「こその係」ともいふ。

## 第七章　文の呼應

【問】 文の呼應とは何か詳說せよ。

【答】 文章中に於て、上にかういへば下にかういはねばならぬといふ習慣上の規約を文の呼應といふ。呼應には種々あるから順次にそれらを述べやう。

(1) 係結の呼應。文中に「ぞ」「なむ」「や」「か」の助詞がある時は、文の終を動詞、助動詞、形容詞の連體形で結び、「こそ」がある時は已然形で結ぶ規約となつて居る。之を係結の呼應といふ。

人やある。



誰か行きし。

雨ぞ降る。

風なむ强き。

われこそ見め。

(備考) 結びは省略される場合があることは前章で述べて置いた。

(2) 自他の呼應。自動詞は自動詞と伴ひ、他動詞は他動詞と伴ふやうに用ゐわけねばならぬ。之を自他の呼應といふ。

身を(他動)立て(他動)道を行ひ、名を(他動)後世に揚ぐ(他動)。

雨は(自動)降り花は(自動)散り人は(自動)歸る。

但し異つた事を記し反對の動作を表すには自他を互用することがある。

(他動)視れども(自動)見えず。聽げども(他動)聞(自動)えず。

花を(他動)折りて(自動)歸る。

(3) 能所の呼應　能相所相各々相伴ふやうに用ゐられるのを能所の呼應といふ。

先生生徒を敎ふ。（能相）
生徒先生に敎へらる。（所相）

親子を養ふ。（能相）
子親に養はる。（所相）

但し異つた事を記すには能相所相を互用する。

風は吹きたれども、花は散らされず。（能相）（所相）
鼠を捕へて嚙まる。（能相）（所相）

(4) 時の呼應　現在、過去、未來の三つの時がそれ〴〵相伴ふやうに用ゐるのを「時の呼應」といふ。

君が行くのは、あの人の仕合せである。（現在）



君が行つたのは、あの人の仕合せであつた。（過去）（過去）
君が行くであらうなら、あの人の仕合であらう。（未來）（未來）

助詞の「ば」「とも」「ど」「ども」の未定、既定も時の呼應に准ずる。

天氣よくば行かん。
天氣よければ行く。
行くとも不在ならん。
行けども在らず。

但し現在、過去、未來、各自に此の時より彼の時をいふ爲には互用する場合もある。

吾人の今日あるは、父祖のありし事を思はざるべからず。
入學することは得たれども、卒業は覺束なからむ。

中止法の用ゐられて居る場合には、その時は末の時と同樣に取扱ふ。

飲み且つ食ひ而して大に遊ばん。
東京に行き、公園に遊び、動物園を見たり。

(5) 反語の呼應　他の文句の意と呼應して、平說しては打消の意となり、打消しては平說の意とする

のを反語の呼應といふ。

友皆行けり、吾のみ何ぞ行かざらむや。

右の例に於て「吾のみ何ぞ行かざらむや」の句は、「友皆行けり」の句に對して反語と見る。そして「何ぞ行かざらんや」は「行く」といふ平説の意となる。

水は身を沒する程なるに、誰か渡るものあらん。

右の例に於て「誰か渡るものあらん」といふ平説の句は、「水は身を沒する程なるに」の句に對して反語と見るべく、平叙の句は「渡るものは誰もない」と打消の意となる。

（備考）反語には助詞「ヤ」「カ」を用ゐる。そして感動詞の「ハ」又は「モ」を添へて「ヤハ」「カハ」「ヤモ」「カモ」として用ゐられる場合もある。

(6) 副詞の呼應　副詞の中にはその意義を下の語に關係せしめて特別の用法を起させるものがある。之を特に副詞の呼應といふ。次にその主なるものを列記することとする。

（イ）「いさ」下に「知らず」と應ずる

人はいさ心も知らず故郷は、花ぞ昔の香ににほひける。

（ロ）「ゆめ」下は禁止又は打消又は打消の語を以て應ずる。

ゆめあやまちすな。

ゆめ忘るること勿れ。



ゆめ〳〵疑ふことあるべからず。

（ハ）豈に　必ず反語を以て應ずる

豈に知らざらんや。

豈に計らんや……。

豈に他の意あらんや。

（ニ）若し　未定、未來の語、又は疑の語に應ずる。

若し雨降らば行かざるべし。

若し君もや訪ふと思ひて午前中は家に居たり。

若し行きたらんには危からまし。

（ホ）たとひ　下に必ず未來の語、又は反語を伴ふ。

たとひ行かずとも叱らるゝ恐なからん。

たとひ死すとも何の恨むる事かあらん。

（ヘ）「よも」「よに」「よにも」下には打消の「じ」に限る。

よも知らざることあらじ。

世に絶えじ。

よにも知られじとや思ひけん。

(ト)けだし　下は必ず疑の語、未來、未定又は推量の語を以て應ずる。

蓋しかゝる事もやありけん。

蓋し人道の然らしむる所なるべし。

(チ)得　下を打消の語又は反語にて應ずる。

え答へず。

えこそ知らざれ。

えやはいふべき。

(リ)過去の副詞は過去、未來の副詞は未來を以て應ずる。

嘗て行きたりし事あり。

夙にその名を知られたり。

彼死して既に三年となりぬ。

明日行かむ。

(ヌ)疑問或は豫期する意の副詞は、未來、未定、推量、又は反語を以て呼應す。



願ふに此事ならむ。

願くば學者とならむ。

恐くは彼は學生ならむ。

凜ふらくはこれならむ。

(7)使役の語は使役の語を以て之に應ずる。

僕をして行かしむ。

木に登らしめて枝を切らしむ。

藥をのませて床につかしむ。

但し異つた事を記すには呼應の法則に反した場合もある。

旗を立てて行かしむ。

時を定めて食はしむ。

花を折らせて佛に手向く。

〔試問〕左の文中の係結を説明せよ。誤あらば正して其の理由を記せ。

(一)貧家に生まれたるこそ幸なりと古聖もいはれたれ。

(二)合戰の道をば武士にこそ任せらるべきに道にもあらぬ計ひいかがあるべき。

（答）（一）貧家に生れたるこそ幸福なれ　1　と古聖もいはれたり。　2　　3

（理由）(1)「生れ」は良行下二段活用の動詞で「うま」迄が語根で「れ」だけが語尾であるからである。

(2)「貧家に生れたるこそ幸福なれ」は挿入文である故。「こそ」の係に應ずる爲めその終りは已然形で結び「幸福なれ」としなければならぬ。

(3)「いはれたれ」の「たれ」は已然形であるが、上に係の「こそ」がない故。普通の結びとして「たり」と訂正する。

（二）正しい。

この文は「合戰の道をば武士にこそ任せらるべけれ」と「こそ」に應ずる爲めに結びの用語を已然形にすべきであるが、第七章の本文注意の項に於いて述べて置いた通りに轉結法を用ゐて直ちに下に連接せしめたのである。

〔試問〕左の文に文字、假名遣或は文法上の誤謬あらばその右傍に訂正せよ。

「月の夜半こそ思ふ隈もなく心の底も澄みはたりぬるものなりされど闇の夜の空晴れて星の光さやかなるに風高ふ吹きこふはまたまさるやうにぞおぼゆ」といへば「雨こそいとまさりぬるを」とある人いふ。（大正六、陸士）

（答）「月の夜半こそ思ふ隈もなく心の底も澄みはたりぬるものなりされど闇の夜の空晴れて星の光さやかなるに風高ふ吹きこふはまたまさるやうにぞおぼゆ」といへば「雨こそいとまさりぬる」とある人いふ。

〔試問〕何がしは力こそ最優等ならね人物は難ずべき所なし。

「こそ」は何處にて結ばれたるか其の規則をいへ。（大正五、東京高師）

（答）「こそ」は「ならね」で結ばれて居る。「こそ」は思想上相關連して居る動詞、助動詞、形容詞の已然形で結ばなければならぬ規則である。

〔試問〕文典上の誤を正せ。

春の夜の闇はあやなし梅の花色ぞ見えね香やはかくれ（明治四三、盛岡農林）

（答）春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるる。

（理由）「ね」は助動詞「ず」の已然形であるから、呼應上「こそ」の係でなければならない。又「やは」は反語であるから呼應上連體形で結ばねばならぬ。

〔試問〕左の句の空位に適當なる假名を補塡せよ。

豈に欣然た□□

如何せば可な□□

はからざりき今日また白旗を見ん□　（明治四一、陸士）

（答）豈に欣然たらざらんや

如何せば可なるか又はらんか

はからざりき今日また白旗を見んとは

〔試問〕左の語句を各要求に應じて改作せよ。

國民の義務を果さざるべからず。（反語の語法に改作せよ）

至誠の德人を動かすこと大なり。（感歎の語法に改作せよ）

今日旗鼓の間に相見えんとは圖らざりき。（倒置の語法に改作せよ）（明治四四、陸士）

（答）國民の義務を果さざるべけんや。

至誠の德人を動かすこと大なるかな。

圖らざりき今日旗鼓の間に相見えんとは。

## 第八章　文章の解剖



【問】文章の解剖とは何か。

【答】文章を種々の品詞又は成分に分解して、その語句相互の關係を明らかにすることを文章の解剖という。

（注意）文章の解剖の時には、成分の省略されたものは之を補はなければならぬ。

單文の解剖

左の文を解剖せよ。

(1) 山高し。

(2) 二人の子は美しき文字を白き紙に黑々と書きぬ。

主語（名詞）　述語（形容詞）

山　高し。

主部（主語の修飾語（主語）（數詞）（助詞）（名詞）（助詞））

二人の子供は

客部（客語の修飾（客語）（形容詞）（名詞）（助詞））

美しき文字を

補部（補語の修飾語（補語）（形容詞）（名詞）（助詞））

白き紙に

**練習問題**

備考（主（主語）補（補語）客（客語）述（述語）
（修（修飾語の略）其他之に倣ふ。）

〔試問〕左の文章を分解して之が構成せる成分を示せ。若し省略せられたる成分あらば補ふべし。

（い）鳥は吾能く其高く飛ぶを知る。

（ろ）塵芥捨つべからず。（明治四三、専門検定）

（答）

（い）文主 鳥は 主 吾 述修 能く 主 述修 述 其高く飛ぶ 客 （事）を 述 知る。（複文）

叙述部 述部 客飾 述部

（ろ）（人々は）主 塵芥（を）客 捨つべからず。述（単文）

叙述部

〔試問〕左の俳句の文脈を解剖せよ。

道端の木槿は馬に喰はれけり。（明治三八、千葉醫專）

（答）

主部 主修 道端の 主 木槿は 補 馬に 述 喰はれけり。（単文）

叙述部

〔試問〕左の語に就いて文の構造を説け。



今日來ずば庭にやおとのいとはれん訪へかし人の花のさかりを。（明治三五、東京高師）

（答）

叙述部 述部 （述修）（述部）（副詞的句） 主 （人） （述修） 今日 （述） 來ずば 補 庭にや 主 おとの 述 いとはれん（複文）

叙述部 述部 客部 述 訪へかし 主 人の （客修） 花の （客） さかりを

（備考）この歌は二つの文から出來て居る。

〔試問〕左の文を文章上より解剖せよ。

櫻散る木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞ降りける。（明治三六、專門檢定）

（答）




〔試問〕左の文を文の構造の上より解け。

帝國議會は毎年之を召集す。（明治三六、東京高師）

（答）




〔試問〕左の文章を解剖すべし。（單文、複文、重文を區別し各の文又は句に就きて省略せられたる語を補ひ、主語、客語、補語、修飾語を示せ）

堪忍は無事長久の基、怒は敵と思へ。勝つ事ばかり知りて負くる事を知らざれば、禍其身に至る。（明治三九、神戸高商）

（答）

叙述部

2 述部

1 述修

客部

文主

（人は）　客修　客　勝つ事ばかり　述　知りて　客修　客　負くる　事を　述　知らざれば

（覆文）

1 2

補部

主　補修　補　述

禍　其身に　至る。

〔試問〕（一）見るこそ樂しけれ。

（二）あら難有の御心。

（三）夢と知りせば覺めざらましを。

右文法に據りて別紙に解剖すべし。（明治四〇、東北農大）

（答）

主部　主修　主　述

（上一動）　（名）（助）　（志久活形容）

（一）見る　事こそ　樂しけれ。（單文）

（感歎）　（轉成名詞）（助）　（み心の修）　（接頭）（名）

（二）あら　難有　の　御心（特殊的の文の形式）

叙述部

述部　述修（副詞的句）　述

主　客　補

（代名）（代名）（助）　（名）（助）　（四段動）（助動）（助）

（三）（我）（そを）　夢と　知りせば

主　名　述

（下二動）（助動）（助動）（助）

（目）　覺めざらましを。（覆文）

〔試問〕左の文を文の成分に解剖せよ。

子どもは餘念なく麩を追ふ池の鯉魚を見守る。（明治四一、高等）

（答）




（襲文）

〔試問〕左の文を文章法の上より解剖せよ。

昨日は東に走り今日は西に走る。（明治四一、高等）

（答）









（單文）

（備考）一つの主語に二つの述語がついて居る單文

〔試問〕左の文を文章法によりて解剖せよ。

能く人に忍び世に戻るをのみ偉人の業と心得るは豪傑の半面を遺れたる者なり。（明治四一、仙臺醫專）

（答）

〔試問〕左の文を文章上より解剖せよ。

春は花をめで秋は紅葉をあはれむ。（大正元、女高師）

（答）




〔試問〕左の文を文章上より解剖せよ。

去る者は追はず來る者は拒まず。（大正二、女高師）

（答）




〔試問〕左の文を文章上より解剖せよ。

ましてさせる功なくして過分の望をいたすことみづからあやぶむるは

しなれど前車の轍を見ることはまことに有りがたきならひなりけむかし。（大正二、専門検定）

（答）

主部
1 修修（補語「ならひ」の修飾である「ありがたき」の修飾語）
2 部

述部（副詞的句）
述修 まして
主部 主修 させる 主
述 なくして
主部 主修 客修 過分の 客
述 いたす 主
叙述部
1 主部
2 主修 客部 客修 前車の 客
述 見る
主部 主修 補 述 なれど
補部 補修 はし
修修 みづから
補部 補修 あやぶむる



1 述部
2 補部 補修 ありがたき ならひ 補
述 なりけむかし。（復文）
主 事は
修修 まことに

〔試問〕高千穂の高ねおろしに草も木もなびきふしけむ大御代を今日しもあふぐ。

文章上より解剖せよ。（大正三、東京高師）

（答）

叙述部
1 客部 客修（形容的句）
2 補 高千穂の 補修
高ねおろしに
主 主 草も 木も
述 なびきふしけん

1 ——

2 ——

述部

客 大御代を

述修 今日しも

主 (國民は)

述 あふぐ。



# (附　錄)

## (其の一)　音韻論と假名遣

音韻論及び假名遣は文法とは餘り關係のない事と思ふので本論の方では之を省略したが、文法學者によつては文法教科書中で既に澤山說かれて居り、隨つて入學試驗問題等にも課せられて居るから、附錄で簡單に之を說明する事とした。

**【問】** 聲音及びその種類に就て說明せよ。

**【答】** 聲音とは、肺臟から出る氣流が發聲器管によつて調節せられたもので、之を四つに分ける。

(1)母韻、　(2)父音(或は發聲)　(3)子音、　(4)鼻音。がそれである。

母韻といふのは、呼息が口腔の反響に依つて生じた音で、必ず聲帶の震動を伴ふものである。「あ」「う」「お」等はそれである。

父音といふのは、聲帶の震動を伴ふものと伴はないものとの二種があるが、つまり呼息が狹い通路を摩擦けたり、或は呼息の故障を破る爲に生ずる音である。

子音といふのは、父音と母音とが合して、成熟した音をいふ、「か」「さ」「を」等はそれである。

鼻音といふのは、鼻腔の反響によつて生じた音を特にいひ表す名稱である。「む」(ん)はそれである。

（備考）我が國では母韻と子音とを記す文字はあるが、父音を記す文字はない。

【問】假名とは何か。その種類をあげて之を説明せよ。

【答】假名とは一つの觀念を表はす意標文字である漢字をかりて、單にわが國語の發音ばかりを寫したものである。

(1)萬葉假名、(2)變體假名、(3)片假名、(4)平假名、がそれである。

萬葉假名といふのは、「萬」(マ)、「手」(チ)、「宇」(ウ)、「江」(エ)等のやうに、漢字をそのまゝに用ゐたものである。

變體假名といふのは、萬葉假名の草書體を稍々崩したものである。例へば、さ、ほ、ゑ、等。

片假名とは萬葉假名の字畫を出來る丈省略してその一部分を取つたものである。

平假名とは萬葉假名の草書體を頗る簡單に崩して作つたものである。

【問】音韻上より見たる假名の種類をあげて之を説明せよ。

【答】(1)清音假名　五十音圖に排列されて居る四十七個の假名は、音が清んで居るから清音假名といふ。

(2)濁音假名　清音假名に反して、加行、佐行、多行、波行の四行の二十箇の假名は、清音假名として用ゐられると同時に、その音を濁らせても用ゐて居るから之を濁音假名といふ。そして假名の右肩に「゛」の符號を附する。之を濁音符といふ。

ヒバチ(火鉢)　カゴ(籠)　ブタイ(舞臺)

ガクモン(學問)　キド(井戸)　シギ(鴫)

(3)半濁音假名　「パ」「ピ」「プ」「ペ」「ポ」の音を半濁音といふ。波行にのみ限る。

(4)直音假名　清音、濁音、及び半濁音假名は、拗れずに眞直に發する音を寫すから直音假名といふ

(5)拗音假名　二個の直音を殆んど同時に發する時に生ずる音を寫す假名を拗音假名といふ。そして特種の拗音假名はないので、一つの假名の下又は稍々右傍によせて他の假名（也行及び和行の假名に限る）を添へてこれを寫す。

しょち(所置)　きゃつ(彼奴)

どしゅ(御酒)　くわいぐわ(繪畫)

(6)撥音假名　或假名の下に書いて、その音が撥れることを表はす假名を撥音假名といふ。

けんけん(拳々)　さんらん(散亂)

(7)促音假名　或假名の下に書いて、その音がつまることを表はす假名を促音假名といふ。促音假名は稍々右傍によせて書くのが普通である。

まっち(燐寸)　ばったう(拔刀)

こっぷん(骨粉)　しっぱい(失敗)

（備考）尙此の外に、長音を表はすには「ー」を、重音を表はすには「ゝ」「〻」「〳〵」「〴〵」「゛」等の符號を用ゐる。前者を長音符、後者を重音符といふ。

【問】 假名遣の種類をあげて之を説明せよ。

【答】 (1) 國語假名遣(及び音便假名遣) (2) 字音假名遣。

(1) 國語假名遣。發音の同一な語、又は類似した語を異つた假名によつて書き別ける法を國語假名遣といふ。

かい(櫂) もとゐ(基) にほひ(匂)
ひえ(稗) つゑ(杖)
きのふ(昨日) しをり(栞) いもうと(妹) おかし(可笑し)
にほひ(匂)

音便假名遣とは 發音の便宜上他の音に轉じたものをその發音通りに寫す法をいふ。

きいて(聞きて) かうて(買ひて)
とんで(飛びて)

(2) 字音假名遣。發音の同一な漢字、又は類似した漢字を異つた假名で書き別ける法を字音假名遣といふ。

さふ(挿) そう(宗) さう(草)
てう(趙) てふ(蝶) ちよう(澄) ちやう(長)
はふ(法)(漢音) ほふ(法)(呉音) ほう(朋) はう(方)



【問】 國語假名遣の識別法に就て記せ。

【答】 國語假名遣で紛れ易いものは

(1) い。 ゐ。 ひ。 (2) え。 ゑ。 へ。 (3) お。 を。 ほ。
(4) は。 わ。 (5) ふ。 う。 (6) じ。 ぢ。 (7) ず。 づ。

の七種である。その識別法は、少數な一方を假名遣表によつて記憶して置き、そして他の方を推知するのが一等便宜な方法で、その通則ともいふべきものを左に掲げて見よう。

第一、音の轉化、主として音便の法則に據つて推知する。

音便に就ては本論でも述べて置いたが、便宜上記すとしよう。

い音便 き・ぎ・しの音がい音に轉ずるもの。

行きて……行いて
聞きて……聞いて
嫁ぎて……嫁いで
稼ぎて……稼いで
出して……出いて

う音便 ひ・く・みの音がう音に轉ずるもの、

笑ひて……笑うて

買ひて……買うて
美しく……美しう
こちみ(小路)…こうぢ
かみべ(神戸)…かうべ

撥音便　び・に・みの音が撥音んに變ずるもの、
飛びて……飛んで
去にて……去んで
讀みて……讀んで

促音便　ち・ひ・りの音が促音つに變ずるもの、
勝ちて……勝つて
貰ひて……貰つて
障りて……障つて

第二、動詞活用の法則に據つて推知する。
「報」の語尾の假名遣を知るには先づ何行何段活用なるかを考へて見る。すると此の動詞は也行上二段活用であるから、その語尾の假名は「ひ」「ふ」でなくして「報い」、「報ゆ」、であることがわかる。之に準じて、



「閉ぢ」「閉づ」（ダ行上二段活用）（故に「閉じ」「閉ず」ではない）
「考へ」「考ふ」（ハ行下二段活用）（故に「考え」「考う」ではない）
「榮え」「榮ゆ」（ヤ行下二段活用）（故に「榮へ」「榮う」ではない）
「生ひ」「生ふ」（ハ行上二段活用）（故に「生い」「生う」ではない）

第三、熟語でない語が重つた時は、大抵同字の音である。
すゞ(鈴)　つゞき(續)　すゞり(硯)
右の語は何れも熟語でないから同字の音を重ね連濁となつたのである。

第四、同じ語は同行中ではその音が相通ずることがある。
うへ(上)　うはぬり(上塗)（波行の音通）
たわやめ(手弱女)　たをやめ（ワ行の音通）

第五、熟語又は語原が熟語である單語の場合には原の一語一語に分解して見ればわかる。
「箱詰」は原の一語一語、卽ち「箱」と「詰」とに分解して假名で記して見ると「ハコ」「ツメ」である。故に「箱詰」の假名遣は「ハコヅメ」ではなくして「ハコツメ」であることがわかる
又、「鏃」の語原は「矢尻(ヤジリ)」であるから、「ヤヂリ」ではないことがわかる。其他
眦　まなじり(目の後(ミリ))　轡　くつわ(口輪(クチワ))
基　もとゐ（本居）　諺　ことわざ(言業)

手綱　たづな（て・つな）　　鍋弦　なべづる（なべ・つる）

【問】字音假名遣の識別法を記せ。

【答】字音假名遣にも紛れ易いものが極めて多くて記憶に容易でない。その通則とも稱すべきものを小原文學士の說によつて列擧すると左の通りである。

第一、構造に似た所があつて字音の同じ漢字は、その字音假名遣も大抵同じい。

衣、依……い。

胃、渭、蝟、謂……ゐ。

交、效、校、絞……かう。

工、紅、功、貢、控、……こう（江・肛・巧・腔……かう）

第二、構造に似た所があつて字音が五十音圖の同行に通ふ漢字はその字音假名遣も大抵同行に通ふ。

因（いん）　烟（えん）　恩（おん）

委（ゐ）　倭（わ）

第三、構造に似た所があつて字音が五十音圖の同列に適ふ漢字はその字音假名遣も大抵同列に通ふ。

押（あふ）　湯（たう）

甲合（かふ）　揚羊（やう）

第四、字音にてア列とエ列との音の下につくイの音はいで、う列の音の下につくイの音はゐである

愛（あい）　海（かい）　對（たい）

水（すゐ）　遺（ゆゐ）　類（るゐ）

第五、漢音にはエイの音を含み、吳音にはヨーの音を含む漢字のヨーはヤウである。

正當（セイタウ）　正月（シヤウグワツ）

平面（ヘイメン）　平等（ビヤウドウ）

有名（イウメイ）　本名（ホンミヤウ）

第六、漢音にはオー・ヨーの音を含み吳音にはう列の音を含む漢字のオー・ヨーはお列の音名にうのついたものである。

公平（こうへい）　公家（くげ）

口頭（こうとう）　口授（くじゅ）

供給（きようきふ）　供物（くもつ）

第七、促音にも長音にも發音する漢字の長音はつをふとしたものである。

合併（がつぺい）　合同（がふどう）

雑誌（ざつし）　雑兵（ざふひやう）
立像（りつざう）　建立（こんりふ）

## 練習問題

〔試問〕 次の漢字に國訓の假名を附せよ。

水、泡、扇、幸、男。（明治四一、高等學校）

（答） 水（みづ）　泡（あわ）　扇（あふぎ）　幸（さいはひ）　男（をとこ）

〔試問〕 左の漢字に國訓の平假名を附けよ。

（イ） 大河の湛へし水に潮添ひて、汀の杙の遠く短し。

（ロ） 杉苗に身をかくしてや雉の聲。（明治四一、金澤醫專）

（答） （イ） 大河の湛へし水に潮添ひて、汀の杙の遠く短し。

（ロ） 杉苗に身をかくしてや雉の聲。

〔試問〕 左の文に假名遣の誤謬あらば正せ。

紅葉はまだ散つてしもうようなことはなひだらふ。（大正元、東京高師）

（答） 紅葉はまだ散つてしまふやうなことはないだらう。

〔試問〕 左の文に假名の誤あらば正せ。

そうゆうわけわなからうとをもう。（大正二、東京高師）

（答） さういふわけはなからうとおもふ。

〔試問〕 漢字に假名を附すべし。

皇威八紘に輝く。

笛の聲聞ゆ。

鯨大洋を泳ぐ。（大正二、陸軍經理）

（答） 皇威八紘に輝く。

笛の聲聞ゆ。

鯨大洋を泳ぐ。

〔試問〕 左の語に普通のよみがなを附すべし。

教師、素生、齷齪、八日、鹽、貝、岩、馬。（大正三、長崎高商）

（答） 教師、素生、齷齪、八日、鹽、貝、岩、馬

〔試問〕 左の文の漢字に適當なる假名を附せよ。

幾十尋なる屋の上より、末遙なる河水の、底にはいらで程もよし、水際に繫げる小舟の中に、ざんぶと音す水烟、纜ちやうと張り斷つて、射る矢の如き早河の眞中へ吐き出されつ、爾も追手と退潮に、誘ふ水なる下り舟、往方も知らず成りにけり。（大正四、米澤高工）

（答） 幾十尋なる屋の上より、末遙なる河水の、底にはいらで程もよし、水際に繫げる小舟の中へ、打累りつゝどうと落つれば、傾く舷と立つ浪に、ざんぶと音す水烟、纜ちやうと張り斷つて、射る矢の如き早河の、眞中へ吐き出されつ、爾も追風と退潮に、誘ふ水なる下り舟往方も知らず成りにけり。

〔試問〕 左の語の誤字を訂正すべし、右側に記入のこと。

思い入る。覺えたり。休らう。堪へず。競ふて。供える。

楷段。浪籍。騰寫。窮行。孤疑。網領。（大正五、長崎高商）

（答） 思ひ入る。覺えたり。休らふ。堪へず。競うて。供へる。

階段。狼藉。謄寫。躬行。狐疑。綱領。

〔試問〕 左の語の誤字を訂正すべし。右側に記入のこと。

堪えず。思ふて。覺へたり。見給へしなり。御免倒。御繁營。低當。

影響。周施。謄貴。（同上）

（答） 堪へず。思うて。覺えたり。見給ひしなり。御面倒。御繁榮。抵當。影響。

周旋。謄貴。

## （其の二） 文法上許容に關する事項

先年文部省が文法上許容すべき事項十六ケ條を發表し、左の如き理由を添附された。

理由書

國語文法トシテ今日ノ教育社會ニ承認セラル、モノハ德川時代國學者ノ研究ニ基キ專ラ中古語ノ法則ニ準據シタルモノナリ然レドモ之ニノミ依リテ今日ノ普通文ヲ律センハ言語變遷ノ理法ヲ輕視スルノ嫌アルノミナラズコレマデ破格又ハ誤謬トシテ斥ケラレタルモノト雖モ中古語中ニ其用例ヲ認メ得ベキモノ尠シトセズ故ニ文部省ニ於テハ從來破格又ハ誤謬ト稱セラレタルモノノ中慣用最モ弘キモノ數件ヲ擧ゲ之ヲ許容シテ在來ノ文法ト並行セシメンコトヲ期シ其許容如何ヲ國語調査委員會ニ諮問セシニ同會ハ審議ノ末許容

ヲ可トスルニ決セリ依テ自今文部省ニ於テハ教科書檢定又ハ編纂ノ場合ニモ之ヲ應用セントス

右の理由によつて從來文法上誤謬として取扱はれて居た次の十六ケ條が許容されることとなつた

一、「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用ヰルモ妨ナシ

二、「シク、シ、シキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用ヰル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

三、過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用ヰルモ妨ナシ

例

火災ハ二時間ノ長キニ亘リテ鎭火セザリシ

金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ

四、「コトナリ」(異)ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用ヰルモ妨ナシ

五、「、、セサス」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

手習サス

周旋サス

賣買サス

六、「、、セラル」トイフベキ場合ニ「、、サル」ト用ヰル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

罪サル



評サル

解釋サル

七、「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用ヰルモ妨ナシ

例

最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム

上下貴賤ノ別ナク各其地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ

八、佐行四段活用ヲ動詞ノ「シ●シカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」ナドイフベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」ナドトスルモ妨ナシ

例

唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ

攻擊開始ヨリ陷落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ

九、てにをはノ「ノ」ハ動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ

例

花ヲ見ルノ記

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ

市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ

十、疑ノてにをはノ「ヤ」ハ動詞・形容詞、助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ

例

有ルヤ

面白キヤ

父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ

十一、てにをはノ「トモ」ノ動詞、使役ノ助動詞及受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

數百年ヲ經ルドモ

如何ニ批評セラルルトモ

强ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ

十二、てにをはノ「ト」ノ動詞、使役ノ助動詞、受身ノ助動詞、及時ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例

月出ヅルト見エテ

嘲弄セラルルト思ヒテ

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ

萬人皆其德ヲ稱ヘケルトゾ

十三、語句ヲ列擧スル場合ニ用ヰルてにをはノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルドキニ限リ最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ

例

月ト花

宗教ト道德ノ關係

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例

史記ト漢書トノ列傳ヲ讀ムベシ

史記ト漢書ノ列傳トヲ讀ムベシ

十四、上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをはノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ

例

誰ニヤ問ハン

幾何ナルヤ

如何ナル故ニヤ

如何ニスベキヤ

十五、てにをはノ「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用ヰルモ妨ナシ

例

何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ

期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ
經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ
誤解ヲ生ズベキ例
請願書ハ會議ニ付スルモ(スレドモ)(スト モ)之ヲ朗讀セズ
給金ハ低キモ(ケレドモ)(クト モ)應募者ハ多カルベシ
十六、「トイフ」トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用ヰル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨ナシ
例
イハユル哺乳獸ナルモノ
顛回ナルモノアリ



## (その三) 雜題

1〔試問〕 先輩を訪ふて教を乞う。
右「ふ」「う」の假名の用法正しきか理由を陳べて說明せよ。(大正七、東京高師)
(答) 「訪ふて」——「訪ひて」の音便である故、「訪うて」と改める。
「乞う」——「乞ふ」の誤。「乞ふ」は波行四段活用の動詞である。

2〔試問〕 昨日こそ早苗とりしかいつの間に稻葉そよぎて秋風のふく。
右の「とりしか」は如何なる語法なるか之を「とりしが」と讀むときは意義語法に如何なる差異を生ずるか。(同上)
(答) 「とりしか」は「とりき」の已然形である。上に係の「こそ」があるから、係結法によつて已然形で結んだのである。「とりしが」は「とりき」の後に助詞の「が」が添つたので、「……こそとりしか」は「取つた」の意。「取りしが」は「取つたが」の意。

3〔試問〕 一旦事あらば吾人は身命を捧げて國家を防護すべし。
右文章法上より解剖せよ。(同上)
(答)

| 述語の修飾語(副詞的節) | 主語 | 述語の修飾語(副詞的句) | 客語 | 述語 |
|---|---|---|---|---|
| 一旦事あらば | 吾人は | 身命を捧げて | 國家を | 防護すべし。 |

4〔試問〕 左の文中の「を」の用法を說明せよ。
(イ)山を下る。 (ロ)國を治む。 (ハ)空を飛ぶ。(大正七、東京女高師)
(答) (イ)「山を下る」の「を」は「下る」動作の標準を示す。
(ロ)「國を治む」の「を」は「治める」目的を示す。
(ハ)「空を飛ぶ」の「を」は「飛ぶ」動作の標準を示す。

5〔試問〕例をあげて文の係結を説明せよ。（大正七、專門）

（答）普通文を結ぶには動詞、助動詞、形容詞の終止形を用ひる。「山に登る」。「花美し」。「行きけり」。等

文中に「ぞ」「や」「か」「なむ」又は「いかでか」「……かは」「……やは」等がある時は、連體形で結ぶ。「朝ぞつめたき」。「人や來る」。「何處にかある」。「彼なん行きける」。「何かは忌むべき」。「誰かはすべき」。

文中に「こそ」のある時は已然形で結ぶ。「人こそ見め」。

但し、係を受ける辭語が文中に在る時は、必ずしも上述の法則に拘泥しない場合がある。「家なん貧しけれど、寄附せり」。

6〔試問〕左の動詞の活用形を示せ。

（イ）堪（ロ）有（ハ）報（ニ）用（ホ）來。（同上）

（答）

| 語根／活用 | 未然形 | 連用形 | 終止形 | 連體形 | 已然形 | 命令形 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 堪（だ） | へ | へ | ふ | ふる | ふれ | へョ |
| 有（あ） | ら | り | り | る | れ | れョ |
| 報（むくい） | い | い | ゆ | ゆる | ゆれ | いョ |
| 用（もち） | ひね | ひね | ねる ふる | ねる ふる | ねれ ふれ | ねョ ひョ |
| 來（きた） | こら | きり | くる | くる | くれ | これョ |

7〔試問〕左の歌に就いて品詞を記し、活用語には其の活用を示せ。

あけばまづ尋ねに行かむ山櫻、こればかりだに人におくれじ。（大正八東京女高師）

（答）あけ（動詞）ば（助詞）まづ（副詞）、尋ね（動詞）に（助詞）行か（動詞）む（助動詞）山櫻（名詞）これ（代名詞）ばかり（助詞）だに（助詞）人（名詞）に（助詞）おくれ（動詞）じ（助動詞）

| 語根／活用 | 未然形 | 連用形 | 終止形 | 連體形 | 已然形 | 命令形 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| あ | け | け | く | くる | くれ | けョ |
| 尋（たづ） | ね | ね | ぬ | ぬる | ぬれ | ねョ |
| 行（ゆ） | か | き | く | く | け | け |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | — | — | む | め | — |
| おく | れ | れ | る | るる | るれ | れョ |
| — | — | — | じ | じ | じ | — |

8〔試問〕 次に擧ぐる動詞に正しき假名を添へよ。

敎○る。覺○る。植○る。酬○て。榮○て。衰○て。恥○ず。超○ず。（大正八、神戸高商）

（答）敎ぶる。覺ゆる。植うる。酬いて。榮えて。衰へて。恥ぢず。超えず。

9〔試問〕 左の文中より音便を指摘し、且つ之を説明せよ。

（一）舟筏を儆うて筑水を下る。

（二）世に處するも亦難いかな。

（三）旦に星を戴いて出で夕に月を踏んで歸る。

（四）そこに立つては暗うございます。（大正八、專門）

（答）（一）儆うて——「儆ひて」のウ音便。



（二）難いかな——「難きかな」のイ音便。

（三）踏んで——「踏みて」の撥音便。

（四）立つては——「立ちては」の促音便。

暗う——「暗く」のウ音便。

ございます——「ございます」のイ音便。

10〔試問〕 文語の變格活用動詞をその口語と對照して活用表を作れ。（大正九、東京高師）

| 文語 | | | | | | | | 口語 | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 種類 | 語根／活用語 | 未然形 | 連用形 | 終止形 | 連體形 | 已然形 | 命令形 | 未然形 | 連用形 | 終止形 | 連體形 | 已然形 | 命令形 |
| 加變 | 來る | ○ | こ | き | くる | くれ | こ | こ | き | くる | くる | くれ | こョ |
| 佐變 | 爲る | ○ | せ | し | する | すれ | せ | せ（し） | し | する | する | すれ | せョ |
| 奈變 | 死ぬ | 死し | な | に | ぬる | ぬれ | ね | な | に | ぬ | ぬ | ぬれ | ね |
| 良變 | 有り | 有ら | ら | り | る | れ | れ | ら | り | る | る | れ | れ |

11〔試問〕 左の歌に就いて、動詞形容詞を抜き出して、其の活用を示せ。

梅ちらす風もこえてや吹きつらむかをれる雪の袖にみだるる。
とひこかし梅盛なるわが宿をうときも人はをりにこそよれ。（大正九、東京女高師）

（答）

| 語幹 | 活用 | 未然形 | 連用形 | 終止形 | 連體形 | 已然形 | 命令形 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ちらす | ちら | さ | し | す | す | せ | せ |
| こゆ | こ | え | え | ゆ | ゆる | ゆれ | えョ |
| 吹く | ふ | か | き | く | く | け | け |
| かをる | かを | ら | り | る | る | れ | れョ |
| 亂る | 亂（みだ） | れ | れ | る | るる | るれ | れョ |
| とぶ | と | は | ひ | ふ | ふ | へ | へ |
| くる | 〇 | こ | き | く | くる | くれ | こョ |
| 盛なり | 盛な | ら | り | り | る | れ | れ |



| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 疎（うと）し | うと | く | し | き | けれ | 〇 |
| よる | よ | ら | り | る | れ | れ |

12〔試問〕 豆爾呼波（助詞、助辭、又は關係詞とも稱す）の性質を概說し、併せてその例語十五箇を擧げよ。（大正九、神戸高商）

（答） 豆爾乎波とは、獨立しては意義をなさないが、單語の下についてその意味を助け、又は他の單語との關係を示すものである。

テ、ニ、ヲ、ハ、モ、ヘ、ヨリ、カラ、マデ、ノミ、バカリ、ダニ、スラ、サヘ、ト。（等）

13〔試問〕 左の動詞の活用を將然（未然）連用、終止、連體、已然、命令の順序を以て示せ。

沈む（自動） 折る（自動） 裂く（他動） 滿つ（他動）（大正一〇、陸士）

（答）

| 語幹 | 活用 | 未然形 | 連用形 | 終止形 | 連體形 | 已然形 | 命令形 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 沈む | しづ | ま | み | む | む | め | め |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 折る | を | れ | れ | る | るる | るれ | れョ |
| 裂く | さ | か | き | く | く | け | け |
| 滿つ | み | て | て | つ | つる | つれ | てョ |

14〔試問〕 左の文より活用する語を取出して其の種類及び活用形を説明せよ。

少壯の時を徒に遊び暮さば老いて後悔ゆともかひなかるべし。

（大正一〇、東京高師）

（答）

| 語 | 活用 | 未然形 | 連用形 | 終止形 | 連體形 | 已然形 | 命令形 | 種類 | 文中の活用形 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 遊ぶ | あそ | ば | び | ぶ | ぶ | べ | べ | 波行四段活用 | 「遊び」は連用形 |
| 暮す | くら | さ | し | す | す | せ | せ | 佐行四段活用 | 「暮さ」は未然形 |
| 老ゆ | お | い | い | ゆ | ゆる | ゆれ | いョ | 也行上二段活用 | 「老い」は連用形 |
| 悔ゆ | く | い | い | ゆ | ゆる | ゆれ | いョ | 也行上二段活用 | 「悔ゆ」は終止形 |
| なかり | ○ | なから | なかり | なかり | なかる | なかれ | なかれ | 形容動詞 | 「なかる」は連體形 |
| べし | ○ | べく | べく | べし | べき | べけれ | ○ | 助動詞 | 「べし」は終止形 |



15〔試問〕 左の文字を國語の動詞に活用せしめ、その連體形を假名書きにして示せ。

植、葬、敎、倒、堪。（大正一〇、東京外語）

（答）

| 語 | 種類 | 活用 | 未然形 | 連用形 | 終止形 | 連體形 | 已然形 | 命令形 | 連體形 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 植 | 和行下二段活用 | 植 | ゑ | ゑ | う | うる | うれ | ゑョ | うる |
| 葬 | 良行四段活用 | 葬 | ら | り | る | る | れ | れ | はうむる |
| 敎 | 波行下二段活用 | 敎 | へ | へ | ふ | ふる | ふれ | へョ | をしふる |
| 倒 | 良行下二段活用 | 倒 | れ | れ | る | るる | るれ | れョ | たふるる |
| 堪 | 波行下二段活用 | 堪 | へ | へ | ふ | ふる | ふれ | へョ | たふる |

16〔試問〕 左の文章中右側に傍線を施したる語に漢字を宛て又文法上誤あらば之を正せ。

わが こくみんはすべからくその ぜんりよくをあげてこのていこくをしてせかいさいかうのぶんめいにたつしうだいゆいつのきやうこくた

らんことをきすべし　これ　そせんのゐげふをせんやうしもつてゐだいなるこくかとわうせいなるせいしんとをこうせいにつたへるゆゑんなり。（大正一二、北海道帝大）

（答）我が國民は須く其の全力を擧げて、此の帝國をして世界最高の文明に達せしめ、宇内唯一の强國たらしめんことを期すべし。是れ祖先の偉業を宣揚し以て偉大なる國家と旺盛なる精神とを後世子孫に傳ふる所以なり。

17〔試問〕左の文に誤あらば正せ。

この川に沿ふて行けば寺の前に出ずべしその隣の家ぞ君の訪ぬる家なりと敎へたる。（大正一二、早稲田高）

（答）この川に沿うて行かば寺の前に出づべしその隣の家ぞ君の訪ぬる家なると敎へたる。

18〔試問〕次の問題に於て「なん」はどんな意味に使はれてあるか

（ア）この人皆失せなん後、我身死ぬべきに定まりたりとも……。

（イ）ただ少し聞きて歸りなんとしるを……。

（ウ）燈火近くともせば、今宵は燈籠にてあらなん。この火消ちてよといふ。

（エ）波風の靜かなる日も船人はかぢに心をゆるさざらなん。（大正一三、廣島高師）

（答）（ア）未來完了。（イ）同上。（ウ）希望。（エ）希望。

19〔試問〕左の文章を各品詞に分け。文中の動詞、助動詞の活用表を作れ。

夜更け汐滿ち童等がたきし火も旅の翁が足跡も永久の波に消されぬ。（大正一三、東京女高師）

（答）夜（名詞）更け（動詞）汐（名詞）滿ち（動詞）童等（名詞）が（助詞）たき（動詞）し（助動詞）火（名詞）も（助詞）旅（名詞）の（助詞）翁（名詞）が（助詞）足跡（名詞）も（助詞）永久（名詞）の（助詞）波（名詞）に（助詞）消され（動詞）ぬ（助動詞）。（向上）

| 動詞 | 語 | 語根 | 未然形 | 連用形 | 終止形 | 連體形 | 已然形 | 命令形 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 更け | 更ふ | け | け | く | くる | くれ | けよ |
| | 滿ち | 滿ち | （四）た（下二）て | ち | つ | つる | つれ | てよ |
| | たき | た | か | き | く | く | け | け |

| 詞 | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 消さ | 消ゃ | さ | し | す | す | せ |
| 助 | | | | | | |
| し | ○ | ○ | ○ | き | し | しか | ○ |
| 動 | | | | | | |
| れ | ○ | れ | れ | る | るる | るれ | れよ |
| 詞 | | | | | | |
| ぬ | ○ | な | に | ぬ | ぬる | ぬれ | ね |

20〔試問〕 左ノ三文ニツキ、誤アラバ之ヲ正シ、○ノ處ニハ文字ヲ補ヘ。

(甲)不都合の事なきようここころえべし。

(乙)善を爲○ば、人に敬われん。

(丙)御裕餘被下成度願上候。(大正一三、東京商大)

(答)(甲)不都の事なきやうこころべし。

(乙)善を爲さば、人に敬はれん。

(丙)御猶豫被成下度願上候。



21【問】 左ノ文章中右側ニ傍線ヲ施シタル語ニ漢字(楷書)ヲ宛テ又文法上ノ誤アラバ之ヲ正セ

キネン ジゲフ ボツコウシコクウンモマタコレニトモナヒテハツテンセサレバシヤクワイハカクジンノドリヨクトキンチヨウトヲエウキウシドウジニシヤウニシヤウタルベキジンブツヲモトムルコトイヨイヨツウセツナルモノアリチシキアリシユワンアルモノハイツキヨクブノショクセキヲクワンゼンニス井カウスベキリキリヤウアリトスレドモハウヨウリヨクアルジンシノコレヲスベルニアラザラバタスウヲシキシテキザイヲテキシヨユハイチシソノノウリヨクヲハツキセシムルコトアタハズ(大正十四。各高等學校)

【答】「スベル」ハ口語。全文が文語文である故、當然「スブル」と改める。「アヲザラバ」ハ假定條件法で、下の文の斷定形式との呼應上既定條件法を用ひて「アラザレバ」としなければならぬ。「ハツテンス」「リキリヤウアリトスレドモ」も變な調子であるが、普通いふ文法の正誤問題としては、强ち訂正する必要はあるまい。

22【問】 左ノ文中右側ニ傍線ヲ施シタル口語ニ漢字(楷書)ヲ宛テ又文法上ノ誤ア

ラバ之ヲ正セ

アイコクシン(　)ハニンジヤウ(　)ノシゼン(　)デコクカヲサカヱシメルモキハメテヒツヨウデアルガ、イマヤヘンケフコロウ(　)ナルハイグワイテキ(　)アイコクシンハクワクダイ(　)サレテ、セカイノタイセイトケフテウ(　)ヲタモ(　)チツヽジコク(　)ノハツタツ(　)ヲキ(　)スコトガカンヨウトナツテキタ。(大正十四、富山高等學校)

【答】「サカヱ」といふ動詞ハ「ヤ」行下二段活用であるから、「サカヱ」であつて、「サカエ」ではない。「キスコト」の「キス」は左行變格活用で、「コト」は體言であるから、連體形を用ひて「キスルコト」としなければならぬ。

23【問】左の文につきて助辭みの用法を區別せよ。

(イ)泣きみ笑ひみ。　(ロ)嵐を寒み。　(ハ)高みに行きて涼みとる。

(ニ)おいみいとけみ。(大正十四、東京商大豫科)

【答】(イ)「み」が二つの動詞の連用形に對立的について反對の働きを對立的に述べたもので、泣いたり笑つたりの意。

(ロ)「み」が形容形の語根について「が故に」の意となつたもの。寒いさに、寒い故にの意。

(ハ)「み」が形容詞の語根について、程度、場所の意を表はす名詞格になつたもの。高い所に行つて涼しさをとるの意。

(ニ)「老いみ」は動詞「老ゆ」の連用形に「み」がついて名詞となり、「いとけみ」は形容詞の語根に「み」がついて名詞となつたものであらうと思はれる。そして老いたる者も幼き者の意であらう、兎に角(ニ)の問題は無理な問題としかいへない。

24【問】左の文に誤なきか。若しあらば正しと思ふ方に改めよ。

(イ)舊幕時代なればいざ知らず。

(ロ)花は雨に打たれ風は散らして跡無し。(大正十四、東京商大豫科)

【答】(イ)舊幕時代ならばいざ知らず。

(理由)假定條件法としなければ、下句の意に續かない。

(ロ)花は雨に打たれ風に散らされて跡無し。

(理由)對立句を用ひた答の文章であるから、上句が受身である故下句も受身の形にしないといけない。

25【問】左の文より活用語を摘出して其の語の活用形を表にして示せ。

（イ）春は若草山の芝緑にもえたち三月堂二月堂霞につつまれてさながら夢の如く秋は春日の社神さび手向山の紅葉夕日にはゆる樣殊に見所あり。

（ロ）潮がだんゞ〳〵さして來て何時の間にか洲が見えなくなつた。

（大正十四、東京高師）

【答】

イ

| 問 | 品詞の種類 | 語／活用形 | 未然形 | 連用形 | 終止形 | 連體形 | 已然形 | 命令形 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | ヤ行下二段活用 | もえ | もえ | もえ | もゆ | もゆる | もゆれ | もえよ |
| | タ行四段活用 | たち | たた | たち | たつ | たつ | たて | たて |
| | マ行四段活用 | つつま | つつま | つつみ | つつむ | つつむ | つつめ | つつめ |
| | 受身助動詞 | れ | れ | れ | る | るる | るれ | れよ |
| | 比況助動詞 | 如く | 如く | 如く | 如し | 如き | （如けれ） | ○ |
| | バ行上二段活用 | 神さび | 神さび | 神さび | 神さぶ | 神さぶる | 神さぶれ | 神さびよ |
| | ヤ行下二段活用 | はゆる | はえ | はえ | はゆ | はゆる | はゆれ | はえよ |
| | ラ行變格活用 | あり | あら | あり | あり | ある | あれ | あれ |

ロ

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | サ行四段活用 | さし | ささ | さし | さす | さす | させ | させ |
| | カ行變格活用 | 來 | こ | き | く | くる | くれ | こよ |
| | ヤ行下一段活用 | 見え | 見え | 見え | 見える | 見える | 見えれ | 見えよ |
| | 打消助動詞 | なく | なく | なく | ない | ない | なけれ | ○ |
| | ラ行四段活用 | なつ（なり音便） | なら | なり | なる | なる | なれ | なれ |
| | 過去助動詞 | た | たら | （たつ）（たり） | た | た | たれ | ○ |

26【問】 左の文に誤あらば正せ。但し理由を説明するを要せず

（イ）仰ゐで天にはぢづ俯して人にはじず

（ロ）水を飲むで源を思うは人情なり

（ハ）三郎さんを連れてお晝前にゐらつしやい面白い事をして遊びましやう。

（大正十四、東京高師）

（答）（イ）仰いで天にはぢず俯して人にはぢず
（ロ）水を飲んで源を思ふは人情なり。
（ハ）三郎さんを連れてお晝前にいらつしやい面白い事をして遊びませう。

**【問】** 次の文から動詞、形容詞、助動詞をぬき出し、その活用形を表に書き入れよ。

一、戰勝に醉ひし豪奢の餘弊と避け難き財政上の壓迫とはここに生活難の聲として青年の耳朶に響きぬ。

二、われわれは生れた以上、生きなければならぬ。（大正十四、廣島高師）

**【答】**

| 問 | 品詞の種類 | 語／活用形 | 未然形 | 連用形 | 終止形 | 連體形 | 已然形 | 命令形 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 一 | ハ行四段活用 | 醉ひ | 醉は | 醉ひ | 醉ふ | 醉ふ | 醉へ | 醉へ |
| | 過去助動詞 | し | せ | ○ | き | し | しか | ○ |
| | カ行下二段活用 | 避け | 避け | 避け | 避く | 避くる | 避くれ | 避けよ |
| | 形容詞ク活用 | 難き | 難く | 難く | 難し | 難き | 難けれ | ○ |
| 二 | サ行變格格用 | し | せ | し | す | する | すれ | せよ |
| | カ行四段活用 | 響き | 響か | 響き | 響く | 響く | 響け | 響け |
| | 現在完了助動詞 | ぬ | な | に | ぬ | ぬる | ぬれ | ね |
| | ラ行下二段活用 | 生れ | 生れ | 生れ | 生る | 生るる | 生るれ | 生れよ |
| | 現在完了助動詞 | た | たら | て（たり たつ） | た | た | たれ | ○ |
| | カ行上一段活用 | 生き | 生き | 生き | 生きる | 生きる | 生きれ | 生きよ |
| | 打消助動詞 | なけれ | ○ | なく | ない | ない | なけれ | ○ |
| | 指定助動詞 | なら | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 打消助動詞 | ぬ | ○ | ず | ぬ | ぬ | ね | ○ |

（備考）「ならぬ」を打消の助動詞と見てもよい。

**28【問】** 左の文章中右側に傍線を施したる語に漢字（楷書）を宛て又文法上の誤あらば之を正せ

アイコクシンハニンジヤウノシゼンデ、コクカヲサカエシメルコトモキハ
メテヒツヨウデアルガ、イマヤヘンケフコロウナルハイグワイテキアイコ
クシンハグワクダイサレテ、セカイノタイセイトケフテウヲタモチツツジ
コクノハツタツヲキスコトガカンヨウトナツテキタ。（大正十四、富山高校）

【答】「サカエ」を「サカエ。」とし、「ヒツヨウ」を「ヒッエウ。」、「キスコト」を「キスルコト。」とする。

29【問】左の文章中右側に傍線を施したる語に漢字を宛て又文法上の誤あらば之を正しその理由を記せ

セイソン　キヤウサウノハゲシキ現代ノ社會ニオヒテハジゼンジゲフコソ
實ニ貴ブベキモノナリサレド人ニオンケイヲ施スニハヨクジヤウト方法
トヲカウリヨシマツ近キヨリ遠キニ乃ボスベシ若シシンセキコキウニシ
テヒキヤウニチンリンシシ者アラバ須ラクオウブンノキウジヨヲナスベキ
モミダリニオンケイニナレテドクリツジエイノ念ヲ失ウベカラズ

【答】「オヒテ」を「オイテ。」とする。

（理由）「キ」の音便は「イ」である。

「貴ブベキモノナリ」を「貴ブベキモノナレ。」とする。

（理由）上に係「コソ」がある故、已然形で呼應しなければならぬ。

「チンリンシシ者」を「チンリンセシ者」とする。

（理由）過去の助動詞「キ」の連體形「シ」は左行變格活用の動詞の未然形に接續する。

「オンケイニナレテ……失ウベカラズ」を「オンケイニナレシメテ……失ハシムベカラズ」とする。

（理由）文意の關係上、悲境に沈淪した者を救ふのはよいが、猥りに恩惠になれさせて獨立自營の念を失はせてはならぬといふ意であるから、使役の呼應にかへなければならぬ。

30【問】打消の助動詞について述べよ。（大正十四、福岡女子專門學校）

【答】文語では「ず」、「ざり」、「じ」「まじ」、口語では「ナイ」「マイ」「ヌ」。

各の活用は次の通り

| 語 | 未然形 | 連用形 | 終止形 | 連體形 | 已然形 | 命令形 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ず | ず | ず | ず | ぬ | ね | ○ |
| じ | ○ | ○ | じ | じ | じ | ○ |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ざり | ざら | ざり | ざり | ざる | ざれ | ざれ | |
| ナイ | ナク | ナク | ナイ | ナイ | ナケレ | | |
| まじ | まじく | まじく | まじ | まじき | まじけれ | ○ | |
| マイ | ○ | ○ | マイ | ○ | ○ | ○ | |
| ヌ | ズ | ズ | ヌ | ヌ | ネ | ○ | |

31【問】 左の傍線を施せる語の異同を辨せよ

山の絶頂に[1]達せざるに[2]足は早くも蹇へに[3]けり。（大正十四、福岡女專）

【答】(1)は助詞で位置を表はす。

(2)は助詞で背反の意を表はす。

(3)は現在完了の助動詞「ぬ」の連用形である。

32【問】 左に誤あらば之を正し其の理由を述べよ但全文を寫し取るに及ばず

溪に沿ふて進まば山高く聳へ水清く流れて塵外の趣あり枝にさいづる鳥も花にたわむる蝶も欣々春をよろこぶものの如く積日の勞苦も一掃せられ足



の勞るを覺へず。

【答】「沿ふて」を「沿うて」とする。

（理由）ハ行四段活用の連用形「ひ」は「て」に續く時は音便によつて「う」となる。

「進まば」を「進めば」とする。

（理由）ここは確定條件法でなければならぬ。

「聳へ」を「聳え」とする。

（理由）動詞「聳ゆ」はヤ行下二段である。

「さいづる」を「さへづる」とする。

（理由）假名遣の誤。

「たわむる」を「たはむる」とする。

（理由）「たわむる」は假名遣の誤。且つこの語は下の體言「蝶」につづく故連體形を用ひねばならぬ。

「疲る」を「疲るる」とする。

（理由）ここは名詞形に用ひてある故連體形でなければならぬ。

「覺へず」を「覺えず」とする。

（理由）「覺ゆ」はヤ行下二段活用である。

33【問】 左の文中文法上の誤あらば之を正し、且その理由を述べよ。

(イ)ひもじゐときにまづひものなし。

(ロ)友人はこう言ふたが自分にはどうしてもさうは思えない。

(答) (イ)ひせじいときにまづいものなし。

(理由)「ひもじき」の「き」の音便は「い」であり、又「まづき」の「き」の音便は「い」である。

(ロ)友人はかう言うたが自分にはどうしてもさうは思へない。

(理由)「こう」は「かく」の音便である故「く」が「う」に轉じて「かう」となり、ハ行四段活用の連用形は「た」に續く時は「う」音便になる故「言うた」となり、「思ふは「ハ行四段活用の動詞である故「思へ」とならねばならぬ。

## （第一表）

意義上より見たる
文語
助動詞一覧表

| 意義上の種類 | 助動詞 | 意義上の種類 | 助動詞 |
|---|---|---|---|
| 時 | き<br>けり<br>ん(む)<br>つ<br>ぬ<br>たり<br>り | 崇敬（相敬） | る<br>らる<br>す<br>さす<br>しむ |
| 使役 | す<br>さす<br>しむ | 推量 | ん(む)<br>らん(らむ)<br>けん(けむ)<br>らし<br>べし<br>(べかり)<br>めり<br>まし |
| 受身（相所） | る<br>らる | 希望 | たし<br>まほし |
| 可能（相能） | る<br>らる<br>べし<br>(べかり) | 指定 | なり<br>たり |
| 否打（消定） | ず<br>(ざり)<br>じ<br>まじ | 比況 | ごとし |
| | | 詠歎 | なり<br>けり |

## （第二表）

意義上より見たる
口語
助動詞一覧表

| 意義上の種類 | 助動詞 | 意義上の種類 | 助動詞 |
|---|---|---|---|
| 時 | う<br>よう<br>た | 崇敬（相敬） | れる<br>られる<br>ます |
| 使役 | せる<br>させる | 推量 | う<br>よう<br>らしい |
| 受身（相所） | れる<br>られる | 希望 | たい<br>○ |
| 可能（相能） | れる<br>られる | 指定 | ○<br>だ<br>です |
| 否打（消定） | ん(ぬ)<br>ない<br>○<br>まい | 比況 | ○<br>やうだ<br>やうです |

（備考）本表ハ終止形のみを記したのであつて
一、否定の○の未然形ハ(なから)連用形は(なかつ)
二、希望の○の未然形(たから)連用形は(たかつ)
三、指定の○の未然形ハ(なら)已然形は(なれ)
四、比況の○の未然形は(やうなら)連用形は(やうに)連體形は(やうな)已然形は(やうなれ)である

## （第三表）文語助動詞活用一覧

（一）動詞に似た活用をする助動

| 種類 | 動詞／活用 | 未然 | 連用 | 終止 | 連體 | 已然 | 命令 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 受身可能崇敬 | (未然)〔行か〕<br>(未然)〔育て〕 | れ<br>られ | れ<br>られ | る。<br>らる。 | る<br>らるる | るれ<br>らるれ | れ<br>られ |
| 使役崇敬 | (未然)〔行か〕<br>(未然)〔育て〕<br>(未然)〔行か〕<br>(未然)〔育て〕 | せ<br>させ<br>しめ | せ<br>させ<br>しめ | す。<br>さす。<br>しむ。 | する<br>さする<br>しむる | すれ<br>さすれ<br>しむれ | せ<br>させ<br>しめ |
| 指定 | (連體)〔行く〕〔商人〕<br>商人 | なら<br>たら | なり<br>たり | なり。<br>たり。 | なる<br>たる | なれ<br>たれ | なれ<br>たれ |
| | (連用)〔行き〕〔育て〕 | な | て | に | て | ぬる | ねる |
| | | て | ぬ。 | つ。 | つる | つれ | て |

# 口語助動詞一覧表

| 種類 | 未然 | 連用 | 終止 | 連體 | 已然 | 命令 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 身（相） | られる | | | | | |
| 可能（相） | れる<br>られる | | | | | |
| 否打（消） | ん（ぬ）<br>ない<br>○<br>まい | | | | | |
| 望 | ○ | | | | | |
| 指定 | だ<br>○<br>です | | | | | |
| 比況 | ○<br>やうだ<br>やうです | | | | | |

（第三表）文語助動詞活用一覧

| 種類 動詞 | 未然 | 連用 | 終止 | 連體 | 已然 | 命令 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 受身 可能 崇敬（未然）（連用） | 〔行か〕れ<br>〔育て〕られ | 〔行か〕れ<br>〔育て〕ら | る。<br>らる。 | るる<br>らるる | るれ<br>らるれ | れ<br>られ |
| 使役 崇敬（未然）（連用） | 〔行か〕せ<br>〔育て〕させ<br>〔行か〕しめ<br>〔育て〕 | 〔行か〕せ<br>〔育て〕させ<br>〔行か〕しめ<br>〔育て〕 | す。<br>さする。<br>しむる。 | する<br>さする<br>しむる | すれ<br>さすれ<br>しむれ | せ<br>させ<br>しめ |
| 指定（連體） | 〔行く〕ならば<br>〔商人〕ならば | なり<br>たり | なり。<br>たり。 | なる<br>たる | なれ<br>たれ | なれ<br>たれ |
| 時（連用）（命令） | 〔行き〕て<br>〔育て〕な<br>たら<br>けら<br>ら | 〔行き〕て<br>〔育て〕に<br>たり<br>けり<br>り | つ。<br>ぬ。<br>たり。<br>けり。<br>り。 | つる<br>ぬる<br>たる<br>ける<br>る | つれ<br>ぬれ<br>たれ<br>けれ<br>れ | て<br>ね<br>○<br>○<br>○ |
| 推量（終止） | 〔行く〕<br>〔育つ〕 | ○ | めり。 | める | めれ | ○ |
| 詠歎（終止）（連用） | 〔行く〕<br>〔育ち〕なり | ○<br>○ | なり。<br>けり。 | なる<br>ける | なれ<br>けれ | ○<br>○ |

（一）動詞に似た活用をする助動詞

| 種類 動詞 | 未然 | 連用 | 終止 | 連體 | 已然 | 命令 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 推量（終止） | 〔行く〕<br>〔育つ〕 | べく | べし。 | べき | べけれ | ○ |
| 打消（終止） | 〔行く〕<br>〔育つ〕 | まじく | まじく | まじき | まじけれ | ○ |
| 比況（連體） | 〔行く（が）〕<br>〔育つる（が）〕<br>〔花の〕 | ごとく | ごとく | ごとき | ○ | ○ |
| 願望（連用） | 〔行き〕<br>〔育て〕 | たく | たく | たき | たけれ | ○ |

（二）形容詞に似た活用をする助動詞

| 種類 動詞 | 未然 | 連用 | 終止 | 連體 | 已然 | 命令 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 打消（未然） | 〔行か〕<br>〔育て〕ず | ○<br>ず | じ。<br>ず。 | じ<br>ぬ | じ<br>ね | ○ |
| 時（未然）（連用） | 〔行か〕<br>〔育て〕<br>〔行き〕<br>〔育て〕 | ○<br>せ | む。<br>き。 | む<br>し | め<br>しか | ○<br>○ |
| 推量（未然）（終止）（終止）（連用） | 〔行か〕<br>〔育て〕<br>〔行く〕<br>〔育つ〕<br>〔行き〕<br>〔育て〕 | 〔行か〕<br>〔育て〕<br>○<br>○<br>○<br>○ | ましょう。<br>らし。<br>らむ。<br>けむ。 | まし<br>らし<br>らむ<br>けむ | ましか<br>らし<br>らめ<br>けめ | ○<br>○<br>○<br>○ |

（三）特種の活用をする助動詞

（備考）表中○ハ活用なきもの　□内のものは現代文には用ゐられぬものであることを示す

一、身（相）ハ（られる）已然形ハ（られれ）

二、指定の○の未然形ハ（なら）已然形ハ（なれ）

四、比況の○の未然形ハ（やうなら）連用形ハ（やうに）連體形ハ（やうな）已然形ハ（やうなれ）である

## （第四表）口語助動詞活用一覽

| 意義上の分類 | 語 | 未然形 | 連用形 | 終止形 | 連體形 | 已然形 | 命令形 | 文語 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 受身・崇敬 | レル<br>ラレル | レ<br>ラレ | レ<br>ラレ | レル<br>ラレル | レル<br>ラレル | レレ<br>ラレレ | レ（ロヨ）<br>ラレ（ロヨ） | る<br>らる |
| 可能 | レル<br>ラレル | レ<br>ラレ | レ<br>ラレ | レル<br>ラレル | レル<br>ラレル | レレ<br>ラレレ | ○<br>○ | る<br>らる |
| 崇敬・使役 | セ、ル<br>サセル | セ<br>サセ | セ<br>サセ | セル<br>サセル | セル<br>サセル | セレ<br>サセレ | セヨ<br>サセヨ | す<br>さす |
| 崇敬 | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | しむ |
| 崇敬 | マス | マセ | マシ | マス（マスル） | マス | マスレ | マセ（マシ） | ○ |
| 現在・完了 | タ | タ<br>タ | タ<br>タリ | タ | タ | タレ（タラ） | ○ | つ |
| 現在・完了 | | ○ | テ | | | | | ぬ<br>たり<br>り |
| 現在・完了 | | | | | | | | き（けり） |
| 過去 | | | | | | | | |
| 未來 | ウ | ○ | ○ | ウ | ウ | ○ | ○ | む（ん） |
| 未來 | ヨウ | ○ | ○ | ヨウ | ヨウ | ○ | ○ | まし |
| 指定 | ダ | ナラ | デ | ダ | ダ | ○ナレ（ナラ） | ○ | たり（なり） |
| 指定 | デス | デセ | デシ | デス | デス | ○ | ○ | ず |
| 打消 | ヌ | ○ | ズ | ヌ（ン） | ヌ（ン） | ネ | ○ | ざり |
| 打消 | ナイ | ナク<br>ナカラ | ナク（ナイ）<br>ナカツ | ナイ | ナイ | ナケレ | ○ | ○ |
| 打消 | マイ | ○ | ○ | マイ | マイ | ○ | ○ | まじ（じ） |
| 推量 | タラウ（ダラウ） | ○ | ○ | タラウ（ダラウ） | タラウ（ダラウ） | ○ | ○ | けむ（けん） |
| 推量 | ダラウ | ○ | ○ | ダラウ | ダラウ | ○ | ○ | （らむ）らん（べし） |
| 推量 | デセウ | ○ | ○ | デセウ | デセウ | ○ | ○ | ○ |
| 推量 | ラシイ | ラシク<br>ラシウ | ラシク<br>ラシウ<br>ラシカツ | ラシイ | ラシイ | ○ | ○ | らし |
| 希望 | タイ | タク<br>タウ<br>タカラ | タク<br>タウ<br>タカツ | タイ | タイ | タケレ | ○ | たし |
| 比況 | やうだ<br>やうです | やうなら<br>やうだら<br>やうでせ | やうに<br>やうだつ<br>やうでし<br>やうで | ○<br>やうだ<br>やうです | ○<br>○○<br>やうな | ○<br>○○<br>やうなれ | ○<br>○○○ | ごとし |

## （第五表）文語の助動詞と用言との連續表

| 未然形に | 連用形に | 終止形に | 連體形に | 已然形に |
|---|---|---|---|---|
| ん（む）（時・推量）<br>る（受身・可能・崇敬）（四段・變・良變以外の動詞に）<br>す（使役・敬崇）<br>らる（受身・可能・崇敬）（四段・變・良變以外の動詞に）<br>さす（使役・崇敬）<br>しむ（使役・崇敬）<br>ず（打消）<br>ざり（打消）<br>じ（打消の推量）<br>まし（推量）<br>まほし（希望）<br>り（時）（佐變に限る）<br>で（打消） | つ（時）<br>ぬ（時）<br>たり（時・指定）<br>き（時）（加變・佐變は例外）<br>けり（時・咏歎）<br>けん（けむ）（推量）<br>たし（希望） | らん（む）（推量）<br>め（推量）<br>らし（推量）<br>まじ（打消の推量）<br>べし（可能推量）<br>べかり（可能推量）<br>なり（咏歎） | なり（指定）<br>如し（比況）<br>（良變は連體形に） | り（時）（四段に限る） |

（第六表）口語の助動詞と用言との連續表

| 接續 | 助動詞 |
| --- | --- |
| 未然形に | う（時・推量）<br>れる（受身・可能・崇敬）<br>せる（使役）<br>（以上、四段活用の）<br>よう（時・推量）<br>られる（受身・可能・崇敬）<br>させる（使役）<br>（以上、四段活用以外の）<br>ない（打消）<br>なから（打消）<br>（以上、形容詞は連用形に）<br>ぬ（打消）<br>まい（打消の推量）（四段活用は終止形に） |
| 連用形に | た（時）<br>ます（崇敬）<br>たい（希望）<br>たから（希望） |
| 終止形に | らしい（推量） |
| 連體形に | なら（なれ）（指定）<br>やうだ（比況）<br>やうです（比況） |

（第五表）文語の助動詞と用言との連續表

| 接續 | 助動詞 |
| --- | --- |
| 未然形に | ん（む）（時・推量）<br>る（受身・可能・崇敬）<br>す（使役・敬崇）<br>（以上、四段・奈變・良變以外の動詞に）<br>らる（受身・可能・崇敬）<br>さす（使役・崇敬）<br>（以上、四段・奈變・良變以外の動詞に）<br>しむ（使役・崇敬）<br>ず（打消）<br>ざり（打消）<br>じ（打消の推量）<br>まし（推量）<br>まほし（希望）<br>り（時）（佐變に限る）<br>で（打消） |
| 連用形に | つ（時）<br>ぬ（時）<br>たり（時・指定）<br>き（時）（加變・佐變は例外）<br>けり（時・咏歎）<br>けん（けむ）（推量）<br>たし（希望） |
| 終止形に | らん（らむ）（推量）<br>めり（推量）<br>らし（推量）<br>まじ（打消の推量）<br>べし（可能・推量）<br>べかり（可能・推量）<br>なり（咏歎）<br>（以上、良變は連體形に、） |
| 連體形に | なり（指定）<br>如し（比況） |
| 已然形に | り（時）（四段に限る） |

| 時 | | | | 指定 | | 打消 | | | 推量 | | | | 希望 | 比況 |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| （…） | 過去 | 未來 | | | | | | | | | | | | |
| タ | | ウ | ヨウ | ダ | デス | ヌ | ナイ | マイ | タラウ（ダラウ） | ダラウ | デセウ | ラシイ | タイ | やうだ やうです |
| タラ | | ○ | ○ | ダラ ナラ | デセ | ○ | ナク ナカラ | ○ | ○ | ○ | ○ | ラシク ラシウ | タク タウ タカラ | やうなら やうだら やうでせ |
| タリ | | ○ | ○ | ダッ デ | デシ | ズ | ナク ナイ ナカッ | ○ | ○ | ○ | ○ | ラシク ラシウ ラシカッ | タク タウ タカッ | やうに やうだつ やうでし やうで |
| タ | | ウ | ヨウ | ダ | デス | ヌ ン | ナイ | マイ | タラウ（ダラウ） | ダラウ | デセウ | ラシイ | タイ | ○ やうだ やうです |
| タ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ヌ ン | ナイ | マイ | ○ | ○ | ○ | ラシイ | タイ | やうな ○○ |
| タレ（タラ） | | ○ | ○ | ナラ ナレ | ○ | ネ | ナケレ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | タケレ | やうなれ ○○ |
| ○ | | ○ | ○ | ○○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○○○ |
| たり | き けり | む（ん） | まし | たり なり | ○ | ず | ○ ざり | まじ じ | けむ（けん） | らむ（らん） べし | ○ | らし | たし | ごとし |

大正十四年八月廿八日納本
大正十四年九月一日發行

問答式 學生の國文法
定價壹圓八拾錢

著作者 荒瀨邦介

發行兼印刷者 東京市神田區表神保町三番地 吉川與四次

印刷所 京都市下長者町油小路西入紹巴町廿一 英文堂印刷所

發行所 東京市神田區表神保町三番地（振替口座東京六〇〇六一〇） 英文堂

發賣所 京都市下長者町油小路西入（振替口座大阪六三〇九二〇） 株式會社 文獻書院

福岡女子專門學校教授
文學士　荒瀨邦介氏著

## 新撰國文詳解

國語解釋の實力を養ふには、中古文、近古文、擬古文の解釋力を養ふを以て秘訣とする。而も最近の試驗問題の傾向から見ても、現代文のみが重要視されては居ない。本書は德川以前の諸書（土佐、伊勢、枕、榮華、大鏡、方丈記、東關紀行、保元、平治、平家、十六夜）（以上、上卷）（神皇正統記、徒然草、太平記、增鏡、義經記、曾我物語、和歌集、謠曲、雜）（以上、下卷）につき、其の要所を選びて詳解したものである。

村上清氏著

三六判總クロース上製
定價（上卷）壹圓八拾錢
（下卷）壹圓六拾錢
送料各拾錢

## 新撰代數要解

內容——剩餘の定理、未定係數法、對稱式と交代式、最大公約數と最小公倍數、分數式、比及比例、方程式、不等式、級數、極大及極小、對數等——以上學習上最も必要な「頭の整理」に重きを置き特に必要なる定理、及範疇を掲げ各々に雜題及練習題を加へ、卷末これが模範解答を附してあります。

四六判二百七十頁
定價壹圓六拾錢
送料八錢

文學士　荒瀨邦介氏著

## 現代文問題解釋法

國語試驗問題中、現代文が吾人の生活上最も關係深く、最も親しい文章であり乍ら、而もその解釋が案外不成績であり勝ちである。著者この點に深く留意して、各專門學校に分ちて、詳細に語釋、通釋を施してある。受驗生諸君の重寶たるべきもの。

三六判三百八十頁
定價壹圓八拾錢
送料六錢

矢田部實三氏著

## 國文法を基礎とした國文の解釋法

從來國文解釋上、國文と文法とが離れ〴〵に講義されてゐた。本書はその弊を補ふ可く著されたもので、國文解釋上特にまざらはしきところ、誤用され易き個所、所謂急所ともいふべきところを文法本位に詳說したものである。

三六判二百八十頁
定價壹圓六拾錢
送料八錢

東京市神田區表神保町三
振替口座東京七一九四五番
文獻書院
京都市下長者町油小路西
振替口座大阪三〇六二九番

## 好評受驗參考書

文學博士 吉澤義則先生監修

### 十一版 擬古文選釋

三六版特製紙數約四百頁
定價壹圓四拾錢送料八錢

江戸時代諸名家の擬古文を網羅註釋したるものにして、中學生諸君の受驗準備書也。

通釋、語釋、參考、文法に至る迄、一字一句も苟もせざるところ、本書の群書を凌駕する所以なり。又原本の解題を加へて、作者及原本に就きての概念を得しめ、的確なる内容を把持し印象を深からしめたるも本書の特色なり。

中等學術協會編

### 八版 明治文學選釋

三六版特製紙數三百三十頁
定價壹圓貳拾錢送料六錢

前書の姉妹篇にして明治時代の文豪三十氏の代表作に詳註及通釋を加へたるもの、受驗書中の白眉。

附錄として現代文と入試問題及入試問題の出所と傾向、熟語と入試問題、現代文と入試問題の量、現代作家略傳、答案の例等を加へたるまた本書の特徴なり。

東京市神田區三崎町 振替口座東京六〇〇六 電話番一六〇〇
京都市下長者町 振替口座大阪三六〇九 電話番二九〇
文獻書院

終